
死のクリスマスイブ

けせら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死のクリスマスイブ

【NZコード】

N6197Z

【作者名】

けせら

【あらすじ】

十年前に世界各国の首脳が集まり「世界統一宣言」が出された。それにより世界から戦争がなくなり人々は平和に暮らすようになつた。だが、戦争の皆無、医学の進歩のため人口の増加は世界の大問題となつていた。国々は宇宙コロニー計画、海上人工大陸計画など独自の計画によって人口問題をクリアしようとしていた。日本もまた独自の政策を打ち出した。「特権者優遇計画」だった。毎年クリスマスの時期に一週間、国が指定した特権者、特命者を指定し、特権者に特命者や市民を殺害させるものだつた。クリスマス間近の日

曜、風間克行のもとに特権者指定の通知が届けられる。

死のクリスマスイブ・1

—

十一月 十日（日）

クリスマスまであと二週間と迫っている。

今年は週末と重なることもあってか、例年以上に街は盛り上がりを見せていた。気象庁の予報によると、ちょうど日曜のクリスマス・イブには雪が降るらしい。

街は十一月も半ばになると早々とクリスマソングを流し、店先にはサンタクロースやクリスマスツリーを形取った商品が並び年末の一大商戦を繰り広げる。いまやクリスマスは正月以上に国民あげての一大行事となっていた。

風間克行はベッドのなか休日の朝を、そして街の騒々しさを嫌気がさすほど十分に感じ取っていた。部屋は一時間も前から十分に暖まりベッドのなかは蒸し暑くさえ感じられるほどになっていた。そのベッドのなかで克行は毛布のなかに頭を突っ込み、光や音によつて眠りを妨げられるのを避けようと試みていた。そうしておいて、しばらくの間暗闇のなかであくまでのんびりといろいろなことを考え巡らせた。

（今年の正月は田舎で過ごすことにしよう）

（ボーナスの残りで何を買おう）

（年賀状を早めに書いておかないと）

どうでもいいことを考へることで頭をゆつくりと田舎めさせむつもりだつた。しかし、その暗闇のなかにまでジングルベルが侵入してきた。

克行の住むマンションは商店街に面しており、嫌でも街の様子は聞こえてくる。すでにジングルベルは克行が目覚めてから数えても

一十回は鳴り響いている。目覚めの音楽としては少々賑やかすぎる。克行にとつてクリスマスなどはどうでもよかつたし、マスクミやデパートに勝手に煽動されるのも嫌だった。子供の頃からサンタクロースが嫌いだった。おそらくそれは風邪をひいて病院に行つた時、そこに置いてあつた雑誌に載つていたマンガの影響だろう。そこには豊かな白い髪を生やし、真っ赤な服と帽子を被つた体格の良いサンタクロースが左手にナイフを、右手にイバラの鞭を持つて二タニタを氣味の悪い笑みを浮かべている姿が描かれていた。そして、別のページにはそのイバラの鞭でトナカイの背を血が出るまで打つている姿があった。その夜、熱にうなされている彼の夢のなかにその姿が現れたことは言つまでもない。

まったく、どうしてあんなものばかりが毎年騒々しく鳴り響くんだ？

克行はうんざりしながら毛布のなかから頭を出すとやつと田を開き時計を見つめた。

時計の針は十時を回つている。

約束は午後一時だ。十一時にここを出れば間に合つだらう。

五十嵐麻美から電話があつたのは昨夜の三時過ぎで、克行はその時ちょうど眠りにつきそうになつた時だつた。彼女は相変わらず夜に強いところをしつかりと教えてくれた。

「めんね、私つたらいつもこの時間に目が覚めちゃつて……明日休めるんでしょ。午後からでいいからいつしょに映画でも観に行こう。

(ひょっとするとあれは夢だつたかな?)

もしそうだとしたらそれほど楽なことはない。しかも、ここ一週間の間、風邪で微熱が続いていて、やつと昨日になつて熱がさがつたばかりだ。麻美に会うのも三週間ぶりで克行も会いたい気持ちはあつたが、今は少しでもゆっくりと休んでいたかった。

今年も終わりに近づき完全週休一日制も有名無実になつていて。克行の務める会社は決して大きな会社ではない。どこにでもあるよ

うな中小企業で大きなメーカーなどからの依頼によつて、システムの設計や開発を行うことを主としている。それでも年末になると決算を睨んだ会社の上司や、正月明けを見越した顧客の注文によりこの時期が一番忙しくなる。

克行は手を延ばすとテレビのリモコンのスイッチを押した。買つたばかりの大型のステレオテレビは部屋の狭さなど気にならないようにもだ半分眠つている克行に対し情報の提示を行い始めた。どことなく会社の上司に似ている年配のアナウンサーがニュースをぶつきらぼうに読んでいる。

朝から会社を思い出すようなそのアナウンサーの顔に克行はほんの少し嫌悪感を持つた。特にその上司とは常に気が合わずに何度も言い合いをしたことだろう。そのたびに『いまにその頭を叩き割つてやるからな』と心のなかで密かに毒づくのだった。

それでも克行はチャンネルを変えようとはせずに、ぼんやりと田観し替わりにそのつくつたような声を聞いていた。

次のニュースです。

突然、アナウンサーの声が重みを帯びたような気がして、克行はまだ少し眠い目を開けるとテレビに耳を傾けた。

今年もまた「特権者優遇計画」が実施されることになり、先日、特権者が決定されました。特権者に関しては内密に特権者に内示される予定になつています。

では次のニュースです。

アナウンサーは早々にそのニュースを打ち切ると次のニュースへと話題を移した。

そうか……今年もやつてくるのか。

克行は憂鬱な思いにかられた。

「特権者優遇計画」

それは五年前政府が発表した究極といえる人口制御政策であつた。今や人口増加は深刻な問題となり、十年前に世界各首脳による「世界統一宣言」によつて一切の戦争放棄が誓われるに至つて、人口

の増加は誰の目にも人類最大の問題になつていった。各国はその問題に頭を悩まし、それぞれ独特的の解決手段を取つていった。ロシアのコロニー計画、アメリカの海上人工大陸計画などが次々に発表されていった。日本も一時期は小子化によつて人工が激減した時期があつたが、養育費保護などの政策も影響し、今では再び人工は増加しつつあつた。そんななか日本政府は一つの人口削減計画を打ち出した。それは毎年ある特定の一週間の間、国や県、市などが一定の特権者を指定し、指定された特権者は市が選び出したリストを中心に自由に六名を削除　つまりは殺害することを許可するというものだつた。そのリストに載る人々は俗に「特命者」と呼ばれていた。その多くは百歳を越える老人や犯罪を犯した者で構成されていた。ただ、それはあくまで市が選定した候補リストであり、特命者リストに含まれない一般市民が、時折は特権者までが殺害されることもまれにあつた。

全国で何名の特権者が選ばれるのか、また、何名の特命者、一般市民が殺害されるのか、それは一切伏せられていたがそれでもかなりの人口削減につながつてていることから見て、その一週間の間、相当の数の殺人が行われていると見て相違なかつた。

マスコミは政府の弾圧によりほとんどそのことに関し触れることは出来ず、国民のほとんどはその悪魔のような政策を身近に感じることはなかつた。だが、克行のように偶然その殺人行為の現場に居合わせたことのある人も決して少なくはなかつた。

(くそ、つまらないことを思い出してしまう)

克行は一瞬感じた不快の思いをすぐ断ち切るように、ベッドから抜け出ると窓辺に近づき、外の様子を見下ろした。

厚手のコートを着こんだ主婦や男たちが忙しげに行き交つているのが見える。ここ一、三年は暖冬が続き、地球の温暖化が例年以上に騒がれていたが今年の冬はオゾンホールも例年より狭く、珍しく寒さが厳しいらしい。環境対策がうまくいっているということだろうか。

克行はそつと窓を少しだけ開けた。天気は良く、暖かそうな日だが街を覆っているが、それでも肌を刺すような冷えた外の空気が暖まっている部屋の空気を犯すかのように飛びこんでくる。克行はその冷たさにすぐに窓を閉めた。

ピンポーン！

突然、玄関の呼び鈴の音が部屋のなかに響き渡った。

「はい！」

克行はパジャマ姿のまま玄関まで行くと、レンズから外をそつと覗いた。若い郵便屋が寒そうに足踏みしながら立っている。その帽子の下からはアルバイトであることを証明するように黄色に染めた髪がのぞいている。

克行はチーンを外すとドアを開けた。

「書留です、印鑑お願いします」

郵便屋は無愛想なまま趣味の悪いすい紫色の封筒を差し出した。克行が急いで印鑑を取つて差し出された書類に印鑑を押すと、郵便屋は何も言わないまま黙つて次の配達へと早足に進んで行つた。

克行はドアを閉めると鍵とチーンをしっかりとかけてから部屋へ戻つた。「世界統一宣言」以来、外国人が増えこの日本も欧米なみに治安が乱れてきている。特に麻薬が昼間でもあちこちで取り引きされるようになり、警察の手にもあまるようになってしまつているといふことがよくテレビでも取り沙汰されるようになつていて。そして、それが一つの原因ともなり、強盗、空き巣などが多発しており、克行でなくともこのくらいの用心は今では当然となつていて。克行は部屋に戻ると改めてうすい紫色の封筒を眺めた。克行の想像どおりその封筒は市役所からのものだつた。

（なんだろう……）

市役所など選挙の時以外はまるで関係のないと思っていた克行は

不思議な面持ちで開封した。なかにはたつた一枚の白い通知だけが入っていた。

だが、その通知を読んでいくうち克行は自分の顔からすっと血の気がひいていくを感じていた。

『風間克行様

このたびは誠におめでとうございます。

今年も再び「特権者優遇計画」が実施されることにあります。今年はみごとあなたが特権者として市の指定を受けることと決定し、取り急ぎ連絡させていただきます。

なお、詳しいことにつきましては十一月十一日（月曜）、市役所内にてご説明させていただきますのでお忙しいなか申し訳ありませんが、午前十時までに身分証明書、印鑑をお持ちのうえお越しくださいますよろしくお願いいたします。

市長』

克行には一瞬それが、自分自身の死亡通知書のように思えた。なぜ自分が特権者なんかに選ばれたのかがわからなかつた。

克行はしばらく通知を手にしたままぼんやりと考え続けていた。治つたはずの風邪が振り返したように体がかつかと熱く、そして全身がだるく感じていた。今眠れば間違いなくイバラの鞭を持つたサンタクロースに出会うこと出来るだろう。

これはあくまで噂だが「特権者」というのはかなり市や国にとって模範的な市民、国民と認められた人物でそのほとんどは公務員が多いとのことだった。

都内の小さなコンピュータ会社に務める若干二十六歳の克行が特権者に選ばれるなどこれまで夢にも思わなかつた。

（それなのに、今年は俺が特権者として人を殺すことになる……）

もちろん、特権者というからにはあくまでも権利であつて放棄す

ることが出来ることになつてゐるということは聞いていた。だが、その反面権利を放棄した者が、翌年は逆に特命者として選考されるという噂もまた克行は聞いたことがある。いずれにしてもそんな権利を望んでいる者は少ないはずだ。

テレビでは昨年からのアメリカの冷害によつて米の供給量が需要を遙かに下回り、米価が以前国内だけでもまかなつていいた頃の3倍にも跳ね上がるだらうといつニュースをアナウンサーが深刻な顔で伝えていたが、今の克行にはそれはあまり重要なものには聞こえなかつた。

(どうしたら……)

克行は麻美との約束の時間に遅れることにも気づかず、ただ呆然と立ちつくしていた。

死のクリスマスイブ・2

二

待ち合わせの時計台の下には、麻美だけでなく多くのカップルたちの姿を見ることが出来た。そのなかでも麻美は一際目をひく存在のように思われた。それともこれはその場に存在しているカップル全てがお互いをそう思っているのだろうか。

「どうしたのよ、あれほど遅れないようになに言つたでしょ？」

麻美は三十分ほど遅れて待ち合わせの場所に現れた克行を見るなり怒ったようにふくれてみせた。丸い童顔に流行にとらわれないショートカットの髪、それに紺のコートが手伝い、とても二十四歳には見えない。以前にも学生と間違われたと言つて喜んでいたこともあつたほどだ。

五十嵐麻美とつき合つようになつてからすでに一年がたとうとしていた。麻美は人材派遣センターに登録されており、克行がよく伺う顧客先に彼女が派遣されていたことをきつかけに知り合い、つき合つようになつた。

麻美の全てを克行は愛していた。今では克行にとつて最も大切な人ということが出来る。ただ一つ難点をあげるとすれば、それは麻美が飼つている猫のことかもしれない。どこから拾つてきたかわからぬような黒猫のルシファー。決して猫が嫌いなわけではないが、あの野性を離れ人間に媚びて生き、それでいて人の顔を見るとベッドの下へ潜り込むような険しさが克行には妙に気に入らなかつた。あのルシファーの青い目を見るたびに心の奥底を覗かれるようなそんな不気味さがあつた。

今、麻美のそばに当然ルシファーはない。それでも気分はあまり良いとはいえない。麻美の顔を見れば心もなごむのではないと思つていたが、心のなかに広がつた暗雲はそう簡単に晴れては

くれなかつた。

「ごめん……」

軽い鬱病にかかつてしまつたかのようには、克行は暗い顔で頭をさげた。特権者優遇計画のことが頭から離れない。

「どうしたの？」

麻美はその克行の様子に、心配そうに克行の顔を覗き込んだ。

「い、いや……」

克行は麻美に特権者に指定されたことを隠すつもりだつた。なぜだか、そのことが麻美に知られれば二人の仲が終わるようなそんな気がしたからだ。

「でも顔色が悪いわ。風邪、治つたんじやなかつたの？」

「大丈夫だよ。さあ、行こう。映画に遅れるだらう」

すると麻美は

「あ、実はそれ嘘なの。本当は三時半から。きっと克行のことだから遅れてくると思って早めの時間を伝えといたの。だから本当はまだちょっとぴり時間があるの」

そう言つて克行のジャケットの袖をそつと摘んで、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「酷いな。そんなに遅れちゃいだらう。時間までどうするんだ？」

「どこか喫茶店で休んでいきましょ。そうすればちょうどいいわ。克行もそのほうがいいでしょ？ 映画までは元気になつて、ちゃんと観られるようになつてね」

麻美は克行の体にもたれかかると、克行を引っ張るようにして歩き出した。克行はそんな麻美を見つめながら、自分が特権者に指定されたことを麻美が知つたらどう思うだらうとしきりに考え続けていた。

そんな克行の元氣のない様子に、麻美は口にこゝを出さないものの密かに不安なものを感じていったようだった。

二人は麻美の言つとおりに喫茶店で少しの間時間をつぶすと映画

館へと足を運んだ。最近、仕事のほうがあまりに急がしすぎて好きな映画を観ることもなかつたので、克行にとつては映画館に足を運ぶのも久しぶりだつた。だが、映画を観ながらも、どうしても克行は今朝の通知のことを忘れることが出来なかつた。スクリーンと自分の間に常にあの白い用紙に印刷された文字がちらついて見える気がした。

『 今年はみごとあなたが特権者として 』

そんなものの俺は望んじやしない。

映画を観ている間中、克行はこれから自分がどうなつてしまつのだろうといつ不安に取りつかれていた。

「克行、どうしちゃつたの？ やつぱりなんだか今日はいつもと様子が違うわ。何かあつたの？」

映画が終わつたあと入つたレストランで、麻美はまじまじと克行の顔を見つめた。すでに六時を過ぎ、外は暗くクリスマスシーズンにだけ光る街路樹に付けられたイルミネーションが美しく街を彩つてゐる。

「そうかな……べつに何もないよ。最近忙しかつたからちよつと疲れてるだけさ」

克行は麻美が不思議がるのを避けるようにつぶやくと食後のコーヒーに手をのばした。実際に自分の今日の態度がいつもと違つてすることは克行も気がついていた。けれど、それを隠そうにも今の克行には隠しきれなかつた。それほどまでにあの通知は克行の心をしめていたのだった。

（どうしてあんな一枚の通知のために俺はこんなに苦しまなきやいけないんだ！）

不安で微かに苛立つていた。

「それならいいけど……仕事そんなに忙しいの？ 来週はともかく、再来週はちゃんと予定空けといてね。仕事で会えないなんてこと言わないでね」

克行の心を解きほぐすそつとするかのように麻美はしきりに冗談

めいた口調で喋り笑顔をみせる。

「再来週？ 何かあつたつけ？」

「やあね。冗談のつもり？」

「え？」

「クリスマスじゃないの」

美しい夢を見る少女のような口ぶりで麻美はつぶやいた。けれど、そのつぶやきさえも克行の耳には恐ろしい呪文のように聞こえ思わずギクリとした。その日こそが「特権者優遇計画」のメインともいえるフィナーレとなるのだ。人々はクリスマスの華やかさに心を奪われ「特権者優遇計画」などのことなどまったく忘れ去り、そして知らず知らずに何人もの特命者たちが凶弾に倒れることになる。まるで

（鼠取り！）

このクリスマスのきらびやかな光が餌になるわけだ。今更ながらにクリスマスを利用する国のやり方に腹がたつた。

「そうだね。もうすぐクリスマスなんだね」

弱々しく呟く克行を不思議そうに麻美は見つめた。

「どうしたの？ 本当に今日は変よ。クリスマスに嫌なことでもあるの？」

「いや、そうじゃないけど。ただ、今日部屋を出るときにちょっと嫌なニュースを見たんだ」

「嫌なニュース？」

「特権者優遇計画さ」

さりげなく言つた克行の言葉に、さすがに麻美も少し表情を曇らせた。

「そう…… そうね、もうすぐその季節だつたわね」

特権者優遇計画のことを知らない者は世の中に誰一人としていないだろう。だが、誰もが極力口に出さないようにつとめているし、実際にはその当日まではほとんどの人たちが忘れてしまっている。また、もし口に出すことがあったとしても、単なる話題の一つとし

て喋るだけで、決してそれに対しても不平不満を語ろうとはしない。いつどこで誰がその話を聞いているか、そしてまたいつどこで自分が特命者リストに載るかわからない。そんな恐怖が知らず知らずのうちに心を支配しているのだ。克行も麻美も昨年まではそんな中の一人に過ぎなかつた。

「何人くらいが対象になるんだろうな」

克行の何気ない言葉に麻美はびくりと体を震わせた。克行自身その言葉が特権者に対するものなのか、それとも特命者へのもののかわからなかつた。

「やめてよ、怖くなっちゃうじゃない」

そう言つた麻美の顔が克行には少し青ざめているように見えた。無理に笑顔をつくろうとする麻美が愛らしく見えた。

克行はそんな麻美の顔を見つめながら、ふとつぶやいた。

「もし僕が特権者に選ばれたとしたら……どうする?」

言つてしまおうか? 言つて少しでも心の重みもとつてしまひ。克行の心の中にそんな衝動が走つた。

「克行が?」

麻美は驚いたような目で克行の目をじっと見つめた。その目はひどく怯えていた。「一ヒーに砂糖をいれようとする彼女の手がぴたりと止まつた。

「例えばの話だよ」

「例えば?」

「そもそも、実際にそんなことがあるわけないだろ?」「

麻美の怯えたような態度に克行は真実を語るのを避けた。あえて麻美に伝える必要はない。ほんの一週間のことだ。麻美を不安にさせる必要などない。何とか自分一人で全てを解決してみせる。

「やだ、そんな冗談言わないでよ。そんな話しても仕方ないわ。またいつもみたいに知らないうちに過ぎてゆくわよ。もうやめましょう、その話は」

麻美は再び笑顔をつくると話題を別のほうへともつていった。

(俺だつてそう思いたい。だけど、今年だけは去年までのよつこはいかないんだ)

克行は麻美の話に耳を傾けながらも心はいつまでも離れることが出来ないでいた。

死のクリスマスイブ・3

三

十一月 十一日（月）

「あなたたちは非常に大きな任務を与えられたのです！」

市長は特別会議室の演壇に立ち、大きな体を震わせながら演説を続けている。暖房がやけに効いているせいか市長は体中から汗をふきだし、それはまるで鯨が潮を吹いているように見えた。

克行はそんな市長の姿を眺めながら、子供の頃に深夜のテレビで観た「白鯨」という映画を思い出していた。

特別会議室には内側からしっかりと鍵がかけられ、市の関係者と特権者以外は出入りが許されないようにされている。学校の教室程度の特別会議室のなかには克行を含めて、三十名ほどの特権者が長机を前に座っている。ただし、実際にはここ以外の場所でも同じような説明会がされており、全ての特権者がここにいるとは限っていない。ほとんどの者がその市長のつまらない演説にあきあきしなかつた。ほとんどの者がその市長の演説が終わるのをじっと待っていた。

克行はこれが終わりしだいすぐに会社へ行くつもりで、いつものようくベージュのスーツを着て出席していた。もちろん会社へは遅れる本当の理由を伝えてはいない。体調がすぐれないため、病院に寄つてから出社すると既に連絡済だ。

「この政策はこの日本を、そして世界を救済するために設けられたものです。つまり、あなたたちは世界を救済する者として選ばれたのです！」

ヤニで黄色くなつたような歯を剥き出したしながら、市長のお世辞にもうまいとはいえない演説は続いた。（よくこれで選挙に通つたものだ）

克行は冷ややかな目で市長の姿を眺めていた。多少の緊張感はあったが、不思議とそれほど「チ」になるほどではなかつたし、昨日通知をもらつた時ほどの不安も感じてはいなかつた。特権者といつてもしょせんただの権利に過ぎない。権利を放棄することで翌年すぐに特命者にされるというのも、根も葉もない噂かもしれない。克行はなるべく楽観的な考え方をするように務めた。ただ、市長の演説を聞いているうちに体のネジがきしんでくるような感覚に襲われていた。そこで、克行は出来るかぎり市長の声を聞かないように心がけながらそつと他の特権者たちを盗み見た。

スーツ姿の四十過ぎのサラリーマン、まだ大学生らしい若者、いつたいどんな方法で選んだのだろうと思つほどさまざま人々が集まつている。

みんな、どんな思いでここに集まつているのだろうと克行は思いめぐらせた。だが、どんな思いであろうとここに集まつた者たちはみな、殺人者となる可能性を持っていることだけは確かだ。もちろんそれは合法的なものとしても、それでも人を殺すという行為に違ひはない。

ここにいる人たちは皆本当に人を殺すことになるんだろうか。

窓際の前の席に座つている若者が市長の演説に抗議するつもりなのかあからさまにあくびをした。だが、市長はいつもこうに臆した素振りもみせず、淡々と演説を続けている。その市長の態度に以前聞いた噂を思い出していた。

あの市長はずうずうしがだけで選挙に当選したのさ。あいつが市長になりたい一番の訳は特権者優遇計画を自分の思いのままに操りたいからなんだ。それにな、ここだけの話だが特権者の数は国から指定されることになつてるんだ。けど、毎年決まって市から指定される特権者はそれよりも一人少なくなつてゐる。なぜかわかるか？つまり、あの市長が自ら特権者になるつてことだ。

(なるほど……)

克行は改めて市長を観察した。あの時はまさかと思つたが、この

市長ならばありえる話だ、と克行は市長の狂喜とも言える熱意のある演説を聞き思つた。

「IJの世界を救つて下さい！人々を救つて下さい！それが出来るのはあなたたちだけなのです！」

突然、市長の叫び声とともに演説が終了した。誰一人として拍手をしようとはしなかつたし、市長もまたそれを期待しているようではなかつた。

市長が満足そうに演台から下りると、すぐに傍らで待機していた市職員の一人が入れ代わつた。

「では、これより「特権者優遇計画」を実施するにおいて、規則、注意等について説明をさせていただきます」

牛乳瓶の蓋のような分厚い銀斑の眼鏡をかけた職員は、そう言ってから一度特権者たちをぐるりと見渡した。気のせいかその日は克行のところでほんの一瞬だけ止まつたように思えた。その姿は一種独特な不気味な雰囲気を持つていた。

「まず、みなさんがたの席の前に置かれた封筒を開けて下さい」

市職員の指示に従い特権者たちは自分の前にある封筒に手をかける。

克行もみんなに習い封筒を手にとつた。封筒の膨らみで封筒の中身は想像がついていた。紙包みでくるまれた拳銃がそのなかから姿を現す。実際に取り出してみるとそのずしりとくる感触が妙に生々しい。もちろん拳銃を手にするのは初めてのことだ。

「みなさんが手にしているのは今年使用されることになったK-9-6Mという型の拳銃です。これは毎年、ある限定された数だけ国によってこの特権者優遇計画のために作成されたもので、これにあう弾丸も支給されるものしかありません。以前にも特権者として登録され弾丸を残されているかたもいるかと思いますがそれらは使用出来ませんのでご注意ください。弾丸は後ほどみなさんが退出する時に各々六発づつ支給します」

まるでテレビショッピングのコマーシャルでもするよつたあつさ

りと市職員は説明し続けた。

「この拳銃ですが、これは実に簡単な操作で実際に正確かつ十分なほどの威力があります」

そう言うと職員は突然、サンプル用の拳銃を構えると部屋の隅に用意された人形の頭めがけ引き鉄を弾いた。弾けるような火薬の音と共に弾丸が放たれ、人形の頭を吹き飛ばした。その爆音に特権者たちの何人がびっくりと肩をすぼめた。

「実際にはこのように人の頭を吹き飛ばすほどの威力はありませんが、それでも殺傷能力は十分にあります」

(つまりそれだけ簡単に人が殺せるということだろう)

克行は心のなかでそう罵つた。

「次に規則について説明します。封筒のなかにさらにもう一つ黄色い封筒がありますので出して下さい。ありましたか？ それが今年みなさんに配布される「特命者リスト」です。決して他の人には見せないようにして下さい」

さすがに手が震えた。自分の手のなかに、これから最優先で殺される人々の名簿があるのだ。

「特命者は一人につき、およそ五人の特権者のリストに名前を載せられています。同一の特命者に対して五人の特権者ということで実行時にダブルのではないかと危惧されるかと思いますが、一人の特権者のリストには三十人の特命者が名前を連ねているのですから、そういうダブルことはありません。もし、自分のリストに載つている特命者が無事、この世から削除されましたら皆さんのリストでもこまめに削除して余計な手間のかかるようなことを避けるようにして下さい。なお、これは言わずとしたことですが、このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしも、それを破った時にはその人にはかかるべきペナルティが与えられることになります。

「厳重に注意して下さい。また、その他の規則についてですが

市職員はさらに続けた。だが、克行の頭のなかにはさらなる規則の説明よりも、特命者リストのことが頭にひつかかっていた。特権

者のほとんどはすでに封を開け、なかのリストを取り出して見ている。なかには何が楽しいのか笑みを浮かべている者さえいる。

克行は封筒を手にすると思いきつて中のリストを取り出した。ざらざらとしたあまり良質とはいえない白い紙に印刷された名前が縦に並んでいる。克行はその名前の列を読みながら、自分の顔から血の気がひいていくのを感じた。

（なぜこんな……こんなことって……どうなってるんだ！）

今にも叫び出したいようなそんな苛立ちにも似た恐怖感が克行を襲つた。まるで自分一人だけが群れから取り残され、どこか遠い世界に消え去つてしまふようなそんな感触に包まれていようのような気がしていた。

克行は震える手で必死にリストを押さえながら回りの特権者たちの行動を見回し、それからもう一度視線をリストへ向けた。

そこに書いてある名前の半数は、克行の見知った者たちだつた。会社の同僚、近所の老人、そして……そして何よりもショックだつたのはそこに恋人である五十嵐麻美の名前があつたことだつた。

楽観的に考えようとしていた気持ちなど遠くへふっとんでしまい、代わりに大きな恐怖が押し寄せていた。全身の毛穴から汗が吹き出している感じがした。

克行はその欄を何度も何度も見直した。ひょとしたら見間違いないじゃないかと思い、同姓同名の別人であることを祈つた。しかし、そこに書いてある名前に間違いはなく、住所、そして職業ともに麻美本人と認めるほかなかつた。

（なぜ……なぜ麻美がリストのなかに……なぜだ？）

克行は運命を呪つた。自分の手のなかに恋人の命がある。しかし、もつと恐ろしいのは麻美の名前の入つたリストをあと少なくとも四人の特権者が握つているということだ。もし、克行のリストにだけ載せられているのなら麻美に危険はない。だが、克行以外にも四人の特権者が麻美を狙うことになると……。しかも、麻美の名前の載つたりストを持っているのが今ここに集まっている者たちだけとは

限らない。特命者リストはあくまでも政府からの依頼でしかなく、特権者には実際には対象を自由に選ぶことが出来るのだ。

(どうしたら……俺はいつたいどうしたらいいんだ……)

克行の頭のなかに麻美の姿がちらついた。麻美の愛らしい笑顔、あの笑顔がこの世から消える……。そう思ひたびに克行の心はかきむしられるような苦しみに襲われた。

「あんた、大丈夫かい？」

隣に座っていた三十過ぎの男が克行の顔を覗き込んだ。だが、その顔は決して心から克行のことを心配してはいない。ただの興味本位でしかないことはすぐにわかつた。克行は慌ててリストを封筒のなかに突っ込んだ。

「い……いえ……」

「あんた、今年が初めてなんだろ」

男はにやりと笑つて言った。その男の落ち着いた素振りに克行は不思議そうに男を観察した。

黒いダブルのスーツに黒のネクタイ、まるで葬式に行くときのような格好だ。

「俺は立花勇作ってんだ。よろしくな」

男は名乗つて左手を差し出した。

「え？」

「えつじやないよ、ただ名乗つてるだけだ。別に特権者同士が名乗つりあつちやいけないって規則はないだろ。さあ、握手だ」

立花は克行の手を取ると無造作に握手した。それは握手というよりも一方的に克行の手を振り回しているというほうが近かつた。

「で、あんたは？」

「風間です。なぜ僕が初めてだとわかつたんですか？」

「そんなの、一目でわかるさ。そんな拳銃おもちゃを握つて震えてるなんて、

初めてに決まってるじゃないか

「あなたは何回目なんですか？」

「俺かい？　俺は三度目さ」

立花は自慢げに答えた。

「そうですか、それじゃ拳銃のほうも慣れてるんですか？」

「慣れてるよ。けど、俺はもともとそういう仕事なんですね。慣れるのが当然なんだ」

「仕事？」

「警察官なんだ」

「警察官？」

克行はどきりとして立花を見返した。人々の治安を守るべき警察官が殺人者の予備軍として克行の目の前に座っている。そのことに克行は不気味な感じを抱いた。

「変かい？ 警察官が人を殺すのは。だが、特権者優遇計画つてのは別にどんな仕事をしていようがそれなりの資格がありやあ特権者になつてもいいものなんだぜ。警察官だろうが医者だろうが、それこそ政治家だろうが……」

立花はヒヒヒと薄きみ悪く笑うとじろりと辺りを見回した。「見なよ、現にあつちのは医者だぜ。それにはあつちのは学校の教師とくらあ」

立花は一人一人克行に説明していく。克行もそれに合わせて一人一人顔をじっくりと眺めていった。やけに神経質そうな者もいれば、自分の置かれた立場など氣にも止めていないような態度でぼんやりと窓の外を眺めている者もいた。だが、ここに集められた特権者たちはどこか、一種独特な雰囲気を持つているように克行は感じた。（このなかに麻美の名前の入ったリストを持っている者がいるかもしれない。ひょっとするとこの男が……）

克行は思いをめぐらせ、一人一人の顔をしつかりと覚え込むように心がけた。

「どうだい、こうやって見てるとなかなか面白いだろ。俺なんかここに来るだけでもう嬉しくなっちまう」

「嬉しい？」

「そうさ。なんといつても天下御免で人を殺すことが出来るんだぜ。」

そんな楽しい」とはないじゃないか。それに人間、死を間近にする
と心が表に出るのさ。普段見ることの出来ない人間の浅ましさがじ
つくり眺めることが出来る。こいつあ、どんな芝居よりも面白いぜ。
赤の他人が死ぬのにどうして躊躇する必要がある?」

「けど、特命者リストには

「特命者リストには自分の知らない人間しか載つていない。もちろん

リスト以外の人間を殺すのも特権者の自由だがね」

克行は立花の言葉に一瞬啞然とした。

「それ、本当ですか?」

「何が?」

「本当に知らない人の名前しか載らないことになつてるんですか?」「そりやそうさ。いくら何でも顔見知りの名前は載つてないだろう。そんなことをしたらさすがに殺しをためらう奴も出てくる。もちろん俺は別だがね。なんだ? あなたのリストには知り合いの名前でもあるのかい?」

「……い、いえ」

克行は口ごもりながらも答えた。自分のリストだけがなぜ他の特
権者たちと違うのかそれはわからない。だが、この男に克行の置か
れた立場を知られたくはなかつた。

「なら問題はない。一人くらい顔見知りが入つっていたところで三十
人のうちの一人だ。気にすることなんかない。もし、他に殺したい
奴がいるなら別にリストに載つてなくたつて構わない。殺つちまえ
ばいい。ただ、そうなると来年は特権者になりそこなうかもしけな
いがね」

立花の言葉はまるで市の圧力そのものに感じられた。克行は言葉
を返すことも出来ず汗ばんだ手でリストを握りしめていた。

死のクリスマスイブ・4

四

全ての説明が終わったのは十一時を少し回った頃だった。市長の演説分だろうか、予定よりもほんのわずかながらオーバーしている。特権者たちは皆それぞれ茶色の封筒を片手に市役所を後にした。克行は足取りも重く、ゆっくりと会議室を出た。誰かにリストのことを聞いただしたかった。だが、そんなことが出来るはずもないし、聞くことも怖かった。

（「だから何の問題があるというんです？　あなたは特権者でこの女は特命者に選ばれた。あなたはこの女を殺さなければいけないんですね！」）

もしそんなことになつたら……。

会議室から市役所のロビーまでは十六段からなる階段四つと一メートルたらずの廊下でつながっている。そのあちらこちらに大理石のテーブルが置かれ、その上に花が飾られている。

（何て嫌味な……）

克行はその花全てをひっくり返して歩きたい衝動に刈られた。花は今日に限つてか全て真っ赤なバラで統一され、その色は克行にどうす黒い血の色を連想させた。

克行はなるべくその花から視線を逸らしながら、とぼとぼと出口の方向へと歩いて行つた。頭の中は今カバンのなかに入つているリストのことでいっぱいになつていて。ふと、どこからか誰かを呼ぶ声が聞こえてきたような気がした。だが、そんなことなど今の克行にはどうでもいいことに思えた。

「克行！」

声はもう一度克行の耳に届き、克行もやっとそれが自分を呼ぶ声だということに気づいた。振り返るとベージュのスーツを着た若い

女性が走り寄つてくるのが見えた。その姿に克行は思わず驚きの声をあげた。

「涼子……」

三浦涼子とは大学時代に一度つき合つていたことがあったが、卒業以来一度も会つていなかつた。

「久しぶりね」

涼子は軽快な足取りで走り寄ると懐かしげな視線を克行に向けた。長い髪がさらりと肩口で揺れている。

「どうしてこんなところにいるの？」

克行は涼子を見つめて言つた。初めて見る涼子のスース姿がやけに大人っぽく感じられた。

「働いてるのよ」

「働いてる？」「……」

克行は驚いて涼子を見つめた。涼子はもつと野心家だつたはずだ。役所で事務員をやつしているといふことは涼子には似合わないようと思えた。

「そうよ。私たちくないかしら」

克行の心を読んだかのように涼子はクスリと微笑んだ。「それよりも克行こそどうしてこんなところにいるの？」

「……」

克行は何と言つていいのかわからず目をキョロキョロさせた。その克行の様子にさすがに涼子も気づいたようだつた。

「まさか……克行が……？」

「ああ……」

克行はなるべく涼子の目を見ないよつにして頷いた。涼子もまた市の職員だということが克行の心を暗くしていた。涼子もまた、そんな克行の心中を察したのか言葉を選ぶかのように視線を動かして誰にも見られていなことを確認するように周囲を見回した。それから、思いついたように克行の目を見据えると言つた。

「ねえ、克行、今時間ある？」

「時間？」

「うん、ちょっとつき合って欲しいの。どつかでコーヒーでも飲みながら話でもしない。克行と会つのも久しぶりだしね」

その言葉の裏に克行は涼子が何を話そうとしているのかすぐにわかつた。

「いいよ、少しくらいなら。おまえのほうはいいのか？　まだ仕事じゃないのか？」

「もう十一時を回ってるわ。もうすぐお昼じゃない。どうせお役所仕事だからさほど忙しくもないし、それに他の仕事と違つて仕事に期限がないようなものよ」

涼子はそう言って笑つた。その笑顔に克行は彼女の暖かい心づかいを見てとれた。

克行と涼子の二人はそのまま市役所を出ると少し市役所から離れた喫茶店に入った。市役所の近くの店には入りたくないと涼子が言い、克行もまた同じように思つたからだ。ただ、その涼子の言動は克行にはひどく危険なように見えた。

涼子はそこでコーヒーとサンドイッチを、克行はコーヒーだけを頼んだ。まださつきのことが頭にこびりついていて、とても食事をする気にはならなかつた。

「それにしても本当に久しぶりね」

涼子は改めて克行の顔をじっと見つめ直した。その潤んだ瞳はつき合つていた頃とまったく変わっていない。それだけに克行はその涼子の眼差しがつらく感じられた。涼子と別れたのは彼女のこと嫌いになつたためではなかつた。ただ、まだ若かった克行にとって涼子のひたむきな愛が重荷に感じられたのだ。

「……うん」「それで？」

克行の思いを察したかのようになつて涼子はすぐに話題を変えた。

「……うん」

どう話していくものか克行は迷つた。

「特権者に選ばれたんでしょう」

「先週通知が届いたんだ」

「どうして克行が選ばれたんだろう」

涼子はまじまじと克行を眺めた。

「俺にもさっぱりわからない。確かに俺は刑事案件を起こしたわけでもないし、市や国に反することをやつてるわけじゃない。でも、別段模範市民つてこともないと思うんだが」

「そうね。本来なら　というより、去年、私が委員をやつてた時なら克行は決して特権者になんか選ばれる立場じゃなかつたと思うんだけど」

「委員をやつてた？」

「そうよ、去年だけだけどね。ちょっとしたお手伝いみたいなもの

軽く笑つて答える涼子の様子に克行は時間の流れをひしひしと感じた。

「それじゃ選定方法が変わったのか？」

「まあ……」

涼子は一つサンドイッチを取り上げ口に運んだ。

「おまえはどうして今年は特権者計画実行委員にならなかつたんだ？」

「つまらないのよね……」

「つまらない？」

「そう、私は國の中核で働きたかったの。いろいろ手を回したんだけど駄目だったの。だから仕方なく市役所に入つたんだけど。特権者優遇計画つて國からの指示によるものでしょ。うまくいけばどこの國家機關に入れるんじやないかと思つて志願したの。でもやつてみたら全然そんなチャンスもなかつてわけ

「それじゃ辞めればいいじゃないか」

克行はインスタントじやないかと思えるほど粉っぽいコーヒーを口にしてから言つた。すると涼子はいとも簡単に答えた。

「うん、私も今それを考へてる」

あまりに簡単な返事に克行は驚きの目を涼子に向かえた。

「本当に？」

「本当に、もうほとほとあんな市役所なんか嫌になっちゃった。別に仕事が嫌いなわけじゃないの。仕事は楽だし給料だって悪くない。ただ上司とうまくいかなきや先だつて見えてるようなもんでしょ」

「そう……」

「でも辞めるつて決めたら楽になつちやつた。やつと私も自由になれるわ。ただ」

「ただ」

「心残りが一つ出来たわ」

「出来た？」

「克行のこと」

「俺の？」

「克行が特権者に選ばれるなんて……まつたく思いもしなかつた」「そんなおまえが心配するようなことじやない。いくら特権者に選ばれたからって何もその権利を絶対に使用する必要はないんだ。特命者にならないだけ良かつたんだ」

克行は自分の心のなかにある不安すらも吹き飛ばすよつ、わざと明るく振舞おうと試みた。だが、涼子はこいつに表情を崩さうとはしない。それどころかますます表情を固くする。

「本当にそう思つてこいるの？ 本当にそれで済むと思つてこいるの？」

「どういうことだ？」

「克行が特権者に選ばれるなんてどこか間違つてゐる。今年の特権者優遇計画は去年とはまるで違う」

涼子の目は真剣そのものでさつきまでの表情とはまるで違つている。克行は突然、思いもしない恐怖にさらされているような気持ちになつた。

「それじゃ、おまえは俺が特権者に選ばれたのはどんな意味がある

つて言うんだ？」

克行は声を潜めて尋ねた。「特権者」という言葉を発するたびに自分自身に何か悪いことが起きるような気がしたし、せりに店のウエイトレスや客に聞かれたくなかった。

「それがわからないのよ。だからこそかえって不安になる。そもそも「特権者優遇計画」なんてものは間違った政策よ。それが毎年のように行われる。しかも国民のほとんどが知っているようであるで知っていない。そんなものの裏にまともなものが潜んでいるわけないでしょ。それに私がそう思うのはもう一つ理由があるの。実はこれは噂なんだけど、特権者優遇計画の上でクーデターみたいなことが起きたらしいの。もしかしたらそれが影響しているのかもしねいわね」

確かに涼子の言う通りかもしれない。克行は特権者に選定される通知をもらつてから得体の知れない不安にかられていたが、涼子の言葉を聞きその不安の姿が一部見えたような気がした。

「これを見てくれないか」

克行は涼子に全てを打ち明けようと思い、今日手渡された書類をテーブルに出した。

「これって特命者リストじゃないの」

「そうだ、こいつは俺が受け取つたリストだ。よく中を見てくれ。俺は今日同じ特権者に選ばれた男から少し特命者について聞いた。その男が言うには特命者というのは特権者にとつてまったくの第三者的な人間が選定されていると言うんだ。つまり知り合いがリストのなかにいるはずがないって」

「その通りよ。まったく知らない人間ばかりというわけじゃないかもしれないけど、それでも直接的な知り合いと思われる人間はリストのなかには入れないことになつてるわ」

「ところが、俺のリストのなかに入つている特命者の半数ほどは俺の直接的な知り合いなんだ」

「何ですつて？」

思わず涼子が驚きの声をあげ、その声に店にいた人々の視線を集める事になつた。涼子はすぐに声のトーンを低くして喋り始めた。

「知り合いが？ そんなはずないわ。有り得ない」

「本當なんだ。その有り得ないことが、俺のリストのなかには起つてゐるんだ。同姓同名つてことも一瞬考えた。だが、全員調べたわけじゃないが住所や職業、電話番号、どれを見てもそれは俺の知つている人なんだ」

克行の心のなかに麻美の姿があつた。自分の持つ特命者リストのなかに麻美が入つてゐる。そんな悪夢のような出来事から早く逃れたかった。

「……やっぱり何か間違つてゐる」

涼子の目がぼんやりと遠くを見つめるよになつてゐる。

「涼子？」

「いいわ」

突然思い起こしたように涼子の視線は克行を捕らえた。

「どうしたんだ？」

「三日だけ待つてちょうどだい。その間に私が調べてみる」「調べる？」

「ええ、おそらく今年も特権者優遇計画に関する資料は、パスワードくらい変わつても去年と同じティスクに入つてゐると思うわ。調べるくらいわけないわ」

「だけど、おまえ今年は実行委員からはずされたんだろう。そんなことしても大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。少しくらいティスクのなかを見たつてバレやしないわよ。それにバレたところで何てことないわ。どうせ市長に恨まれたところで特命者リストに加えられるだけじゃない」

『冗談交じりに涼子は言った。克行は驚きの目で涼子を見た。しかし、涼子のほうはまったく動じることなくニッコリ笑うとおもむろにバッグを開いて中を見せた。バッグの奥に何か黒い金属の固まりが見えた。

「それ……」

「スタンガン、FBC2X、克行も名前くらい知つてるでしょう」
克行もそのスタンガンのことだけは知つていた。見たことがないが聞いたことはある。三年も前に売り出されたものだが、売り出されてすぐにある事件にこのスタンガンの名前が出たことがある。事件そのものはどこにでもある婦女暴行事件だった。深夜、帰宅途中のOさんが近所の大学生に襲われそうになつたというものだった。だが、結末は他のものとは違つていた。襲われそうになつた女性がこのスタンガンを持ち歩いていたのだ。スタンガンは通常のものよりも三倍もの電流が流れるようになつており、さらにその電流の発せられる部分はバネ仕掛けで目標に向かつて十メートルは飛ぶようになつていた。あいにく夏の暑い時期で大学生はTシャツ一枚という姿だった。その裸同然の心臓部分にスタンガンは噛みつき、一気に電流を放電したのだ。大学生は一瞬のうちに硬直状態になり、騒ぎに駆けつけた住人によつて救急車で運ばれたがそのまま目覚めることはなかつた。あまりにも強力なそのスタンガンはその事件で社会的な問題になつたが、その反面女性の強力な味方として人気を得ることになつた。結局、スタンガンは改良され通常のものの一倍程度の電流に押さえられることになつた。

今、涼子の持つているものは改良後のものではなく、旧式のもののように克行には見受けられた。

「おまえ、いつもそんなもの持ち歩いてるのか？」

「いつもじゃないわ。特権者優遇計画を実施期間中だけ、職員には皆これが配られることになつているの」

「何のために？」

「市で選んだ特権者に逆に命を狙われないためよ。私もまだこんなもの使つたことはないけどね。いくら何でもこいつを使つことにはならないでしょう」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫、そうすれば克行がなぜ特権者に選ばれたのか調べられる

「それならもう一人調べて欲しい人がいるんだ」

「誰？」

「特命者リストにある五十嵐麻美、彼女がなぜ特命者になったの調べられないかな」

言い出しづらかったがそれでも言わないわけにはいかなかつた。

危惧した通り麻美の名前に涼子の顔がこわばつた。

「誰なのこの人？ ひょっとして克行の恋人？」

「……うん」

二人の間に一瞬冷たい空気が流れた。一瞬、涼子がきつく唇を噛んだのが見えたが、それでも何も深くは聞こうとはしなかつた。

「いいわ、そのリスト、今夜にでも私のところにファックスで送つて」

涼子は克行から視線をそらすとポケットから名刺を取り出すとその裏に自分の携帯電話の番号と、ファックスの番号を書き込んだ。

「頼むよ」

克行はその名刺をクリップで特命者リストにはさむと書類といっしょに封筒のなかに入れた。

死のクリスマスイブ・5

五

克行がマンションに戻った頃にはすでに暁を過ぎていた。市役所に寄った後、そのまま会社へ向かうつもりでいたが、今ではそんな気持ちも失せてしまっていた。自分の持つ特命者リストのなかに、会社の人たちも数名載っている。彼らにどう対応したらいいかわからなかつた。それに何よりも拳銃を持ったまま仕事をする気にはならない。

克行はコートを着たままダークグレイのカーペットへ腰を降ろした。まだエアコンがきいていないために、部屋の空氣もカーペットもひんやりとしている。

克行はバッグのなかから書類を出してテーブルの上に広げた。拳銃の入った包みがコトリと音をたてて落ちる。

そつと包みを開くと黒く真新しい小型の拳銃が姿を現した。見た目は玩具の拳銃と変わりないのに、実際に握つてみるとそのずしりとくる重さで、それが玩具などではないと改めて実感させられる。弾倉にはまだ弾は装填されていない。試しに拳銃を操作してみると、思つた以上に扱いが簡単に出来ていることに驚いた。説明書のようなものが一枚封筒に入つていたがそれを読まずとも扱うことは出来そうだ。

見ると小さな透明のプラスチックのケースに金色の弾が六発、奇麗に並べられてい入つている。一つ一つには丁寧にナンバーがふられている。克行の弾丸にはTR13-TX-6001から6006までのナンバーが刻まれている。このナンバーによって、誰が殺つたものか判断するためなのだろう。

(まるで小学校の時の無記名アンケートと同じだな)

克行は心のなかで嘲つた。

克行が今でも憶えている小学校の時のアンケート。それは教師が子供たちに無記名だということをくどいほど説明した後、結局は席順ごとに並べて回収されるという卑怯な手段のものだった。そして、それは子供たちが秘密にしておきたいものに対してもほど行われた。もちろんそれが実行出来たのは低学年のうちだけだったが、それでも克行はそのからくりに気づいたとき教師に対して強烈な不心感を抱いたことを今でも憶えている。

克行はケースのなかから一つ取り出し、試しに一発だけ弾倉に装着してみた。ガチャリという音で弾倉が拳銃の中心に吸いこまれてゆく。まるでそれを待っていたかのように。この型の銃は外側からは弾の有無を判断することは出来ない。

何の気なしに部屋の隅の花瓶に狙いをつける。ふと、妙な感覚が心のなかに走る。そして、同時に今まで知らなかつた自分が眠りから醒めるようなそんな不安が湧き上がる。

克行の瞼にへラへラ笑いながら楽しげに拳銃を乱射する男の姿が蘇つた。

寺泉とか、泉谷とか、確かにそんなような名前だったと克行は記憶している。

昨年の冬、克行が特権者優遇計画を初めてこの世のものと実感した時だった。深夜、仕事の帰りに克行は駅のホームで最終より一、三本前の電車を柱に寄りかかるようにしながら待っていた。ホームには克行と同じように仕事で疲れ今にも眠りこみそうにしている中のサラリーマンや、デートの帰りらしいカップルがベンチに座りながら話をしている。少しして克行は泥酔状態でふらふらとホームの端から端を歩いている男が目に入った。男は電車を待つ人々に一々何かをつぶやきながら、ただふらふらと歩いていた。たいがいの人たちは男が何を言おうと何をしようと無視して構おうとはしなかつた。男はベンチで身を寄り添わせているカップルにも同じように近寄り何かをつぶやいた。それはたんなるカップルに対する冷やかしのものだったのかもしれないし、あるいは女性に対して卑猥な言

葉でからかつたのかもしない。どちらにしてもさほどたいしたことないことだらうと克行は見ていた。しかし、それに対し青年はからかわれたことに怒りを覚えたのかすくと立ち上がり、そして泥酔している男に対して怒鳴り始めた。

「おまえには関係ないだろ！ どつか行け！」

青年の声は離れた場所にいる克行にさえ聞き取ることが出来た。周りの人たちはやれやれとばかりにぼんやりと横目でちらちらと見ている。

青年は一度、三度男を突き飛ばし男が黙つているとジロリと睨つけさつさと彼女のいるベンチへと戻つて行った。

アナウンスが聞こえ電車が入つてくることを伝えている。
誰しもこれで酔っ払いと青年との争いは終わつたのだろうと思つた。青年もすっかり深夜に出会つた酔っ払いのことなど忘れてしまつたかのようにベンチから立ち上がり入つてくる電車に合わせるようにホームで一人立つてゐる。しかし、酔っ払いは真つ直ぐに背を向けている青年の背後につかつかと近寄ると何か黒いものをポケットから取り出し青年に向けた。

ズガーン！

克行の耳に、一瞬スローモーションのように响し出された。

青年の体はつんのめるように軽く前に浮き上がり、重量の法則に従いつのまま電車のはいつてくるレールの上へと落ちていった。

電車の急ブレーキ。

女性の叫び声。

そして、男のヘラヘラとした笑い声。

聞こえるはずのないもの、聞こえなければいけないものが交差しあい、「じちや」「じちや」になつて克行の耳へ届く。

男は青年を撃つたことで自制心を失ったのか、それとも酔っ払つてしたことでもともと失っていたのか、触覚を失つたアリのように

うわううとううつつき、至る所に拳銃を乱射はじめた。当然のように誰も男を止めようとはせず、逃げ惑うだけだった。克行も例外ではなくただ驚くばかりで何をすることも出来なかつた。結局男は拳銃に装填されていた全部の弾丸を撃ちつくし、それでも撃ち足りないのか弾丸の入っていない拳銃をカチリカチリと鳴らしているところを鉄道警備員に取り押さえられた。

男が特権者でそれがわかりしだい釈放されたということを、克行は翌日の朝のニュースで知ることになった。

本来、特権者優遇計画で犠牲（国に云わせれば受刑）になつた者は被害者として扱われない。そのためマスコミでも事件として発表しない。しかし、この時はあまりにも事件が大きすぎたためにほんの一、「三分だけだが放送されることになつた。それでもキャスターが淡々と、事件のことを報じた後でこれは事件ではないという意味のことを付け加えた。

男の名前は忘れてしまつたが、男の顔だけは忘れることが出来ないでいる。

（今度あの男がどうなつたのか涼子に調べてもらおう）

今の自分の姿があの男の姿にだぶるようなそんな嫌なイメージが克行の頭を霞め慌てて弾丸を取り出すと銃をテーブルの上に投げ出した。

拳銃は軽く一、三回テーブルの上をクルクルと回ると銃口を克行のほうへ向けてピタリと止まつた。それはまるで（「おまえが撃たないのなら、俺がおまえを撃つてやるぜー」）と言つていいようだつた。

克行はすぐに銃をもとのように紙包みに包みどこにしまおうかと思案した。部屋には克行しかいないので、どこへしまつても良かったのだがそれでも出来るだけ田につかない場所へ、そしてすぐに何かあつたら手が届き忘れてしまうようなことがないところへ置いておきたかった。部屋の家具といつたらほとんどが棚の類いで引き出しのあるようなものは一切見当たらない。部屋を見渡した結果

克行はベッドの引き出しへしまつことに決め、その一番奥へ拳銃を突っ込んだ。

(これで拳銃はいい、あとは……)

克行の目に市役所からよこされたいくつかの特権者優遇計画に関する書類が目についた。一番上に黒い厚手の表紙のついた特命者リストがある。

克行は恐る恐る手をのばし、もう一度リストを開いた。今度は市役所で見た時よりも一人一人じっくりと確認していく。確認のうえ別人であればいいと何度も何度も思いながら確認していく。けれど、克行の祈りは通じることなくやはりそれの多くは克行の知った人々の名前だった。そのなかでも何よりも麻美の名前がひときわ大きく克行には見えた。そしてそれは他の特権者にも同じように麻美の名前が特に目立つて見えるのではないかという錯覚さえも引き起こした。

(五人、俺をいれて五人の特権者が麻美の名前の入ったリストを持っている)

そのことが何よりも心配だった。もし、自分のリストだけに麻美の名前があったなら何の心配することもないだろう。来年特権者を外されることを、最悪の場合自分の名前が特命者リストに載ることを覚悟すればいいだけの話だ。麻美に銃を突きつけられるよりも自分に銃を突きつけられたほうが数倍気楽でいられるだろう。

(だが、今年銃を突きつけてるのは俺じゃない。麻美なんだ)

克行の心のなかには暗く、重々しい影が広がっていた。例えそれが参考リストとはいってもリストに載っているのと載っていないのとは大きく違つてくる。

(何とか救えないだろうか)

克行は書類を袋から出し、その規則や条文を読み始めた。そのなかから麻美を救う手段をなんとか探し出したかった。しかし、そこに書いてあるのは本当に簡単な今日あの分厚い眼鏡をかけた市職員が喋つた以外のことは一切載つていなかつた。確かに憲法のように

細かく規則が載っていたところで裁判に持ちこむことが出来るわけもなく、市に麻美の名前をリストから削るようにならざるを得ないだろう。一つだけ特命者のリストからの削除という項目があつたが、それはまったく話にならない。特命者リストから外される条件は唯一その当事者が特権者優遇計画の直前に死を向かえた場合、または他の特権者によつて受刑になつた場合だけなのだ。いずれにしても特命者の未来にあるのは死だけしかない。一週間逃げ続けるといいなどという考え方も基本的に無意味な考え方だ。なぜなら特命者リストに名前が載つたことは発表されるわけでもなく、また特権者が特命者に伝えるとその特権者は処罰（内容は不明）されることになつてゐる。

（処罰？）

克行の心にある一つの思いが走つた。

（処罰？ そんなものくらいで麻美が救えるのなら……。それに特命者全員は無理としても麻美だけならば伝えたところで市役所にばれることだつてない。そうだ、麻美に特命者リストに入つていることを伝えて一週間特権者から逃げればいいんだ）

それはごく単純な考え方ただつたが、暗闇のなかを暗中模索してきた克行にとって一筋の光となつて未来を照らしていふように思えた。

R R R ……

突然、携帯電話の電子音が部屋中を満たした。部屋はすでに暖まり少し暑くさえ感じ出している。克行は思い出したようにコートを脱ぐとベッドへ投げ出し、その手で上着のポケットのなかから携帯電話を取つた。

「はい」

風間さんですか？

会社の後輩である磯崎和歌子の声だった。

「ああ」

「体、大丈夫ですか？」

「体？」

医者に寄つてから出社するつて言つてましたけど。休まれるんですか？

磯崎和歌子の言葉に克行は眞呑が悪いと嘘をついたことを思い出した。時計を見るともう一時を過ぎている。

もしもし……あの、そんなに悪いんですか？

克行の下で働いていることもあってかその声は本当に心配しているようだった。

「いや、そんなこともないけど……でも念のため今日は休ませてもいいわよ」

実際に熱があがつてゐる氣がした。

電話をしてきたのが彼女でよかつたと克行はほつとしながら答えた。彼女の名前はリストのなかに載つてはいない。今日はリストに載つている当事者とはまともに話が出来そうになかった。

何か用事ありますか？ 仕事のことで何か。

「そう……特に思いつかないな。この前頼んだプログラム、明日までに仕上げられるかい？」

「はい、大丈夫です。あ、西崎さんに変わりますか？」

同僚の西崎の名前に克行はびっくりと身構えた。西崎の名前はリストの十三番目に載つている。電話の向こうで電話が微妙に西崎に送られる気配がした。

「いや、いいよ。別に用事はないから」

克行の言葉で西崎の出る気配が消える。

「そうですか。他に何か？」

「ないよ、明日は出社するよ。それじゃ、明日」

「はい、お大事に。失礼します。」

「さよなら」

克行は静かに、けれど素早く切つた。

死のクリスマスイブ・6

六

十二月 十二日（火）

駅から歩いて約五分、そのオフィスビルの七階に克行の務める会社がある。

そのビルにあるのは克行の会社ばかりでなく、他に五社ほどがビルを借りていて、そのためがあまりセキュリティは厳しくなく、誰でも自由に出入り出来る。克行の会社では七階から九階の三つのフロアを借りている。社員数は約二百人、このビルではその半分ほどが働いており、他の社員たちは皆顧客先での勤務が多い。

九時十五分、克行はいつもよりも少し遅く出社した。今ではフレックスタイルの導入は常識のようになつてはいる。もちろん克行の会社も導入してはいるが、克行の会社の場合顧客との密接した打ち合せなどが頻繁なためそうそう遅く出社するわけにはいかないため、社員のほとんどが九時までには出社するようになつていた。

「おはようございます」

オフィスに入るとすでに仕事に入っていた社員たちが顔を見上げた。

「おはよう」

克行は出来るだけ視線を避けるようにしながら自分の席へと歩いていった。克行のいるフロアは若い社員たちで占められ、管理職以外は克行と同年代か年下の者が多くつた。

「よう、体大丈夫か？」

席へつくとすぐに向かいの席の西崎が声をかけた。西崎とは同じ年に入社し、その後ずっと同じ課で働いてきていた。日焼けしたその顔はスポーツマンらしさを誇示しているようにも見えた。

「たいしたことないよ」

「良かつた、今おまえに倒れられちゃ 大変だからな」

西崎はそう言って笑った。その笑いすら今の克行には苦痛に感じた。

(おまえの命は今、危険にさらされてるんだぞ)

そう忠告してやりたかった。だが、そんな忠告が出来るはずもなく、それどころかなぜこの男が特命者リストに載せられるのだろう、と好奇心すら覚えた。

実際、特命者リストのなかに登録されている人たちのなかに克行の知っている人たちは何人もいるのだが、なぜその人たちが特命者リストに登録されているかそれがまったく克行にはわからなかつた。「あ、そうだ……風間、おまえのことを部長が呼んでたぞ」「部長が？」

「おまえ何かしたのか？」

西崎は冗談めいた口調でそう言つと、克行の答えを待たずにつぐに仕事に戻つた。それは今の時期まったく当たり前の動作で克行も気にならなかつた。それほど皆仕事に追われているのだ。

オフィスの一番奥の部長席を見ると、部長の桜川が克行の出社に気づいた様子でこちらを見ている。

部長の桜川登は今年すでに七十八歳を向かえている。八年前高齢化社会により政府は年金支給年齢をついに八十歳以上と決めた。その影響で企業の定年年齢も引き上げられたために桜川は今でも現役として働き続けている。すでに頭は剥げ上がり、残つてゐる髪もほとんどが白く変わつてゐる。

克行は所せましと並んでいる机のわきの通路を通つて部長の席へ歩いていった。足がやけに重く感じる。

「やあ、体の具合はどうかね？」

克行が近づくと桜川は相手を探るよつた目で言った。

(なぜ、部長が?)

(なぜ、部長が?)

克行は不安になつた。桜川が知つてゐるのではないかと克行は危惧した。これまでにも体調を悪くして休んだことがなかつたわけではない。だが、そんなこと今まで尋ねられたことなど一度もなかつた。それどころかこれまで桜川とは口をきいたこともほとんどなかつたからだ。

「……ええ、もう大丈夫です。けど……なぜですか？」

「ああ、いや……」

克行の問ひに桜川は言い難そうに手をそらした。

「どうかしましたか？」

「いや……べつに……ただ会社も今だいぶ忙しくなつてるので体でも悪くしたんじゃないのかと思ってね。君、昨日休んだりう。大丈夫かね」

その言葉の様子に克行は、桜川がもつと別のことを見たいのだと察知した。それは克行が最も知られたくないことだらうといふことも。

（部長は昨日何があつたか知つてる……でもなぜ？）

克行は当惑した。もちろんそれは克行の想像でしかないし、桜川が知つているなどということを信じたくもない。だが、桜川の不可思議な言動は克行の心を揺り動かした。

「風間君？」

桜川の声に、克行は我にかえつた。

「は、はい」

「君、本当に大丈夫かね？」

「ええ、もちろんです」

克行は平静を装つた。

何かが起つたのはその日の夕方だった。克行はあの後何も考へないように務めた。特権者優遇計画のことを一切忘れ、仕事だけに意識を集中した。

だが、一本の電話が鳴つたことで事態は急変した。

やあ、風間さんかい？

一瞬克行には誰からの電話なのかわからなかつた。

「どちら様でしよう？」

克行の頭のなかを顧客先の人たちの顔がいくつも横切つて行く。だが、どれもその声に該当するものはなかつた。

俺だよ、俺、立花だ

克行の頭のなかが真っ白になつた。

「立花……」

そうだ、昨日市役所で会つたるう。忘れちまつたわけじゃないだろう

もちろん憶えていた。特権者に選ばれることを唯一の楽しみとしている警察官。克行は一瞬自分が過去に大きな犯罪を犯したことのある人間に思えた。これは刑期を終えて出所した受刑者が昔刑務所で知り合つた受刑者に会つのに似ている。ほんの少しの間忘れかけていた計画のことが一気に蘇つてきた。

「……なんでしょう？」

克行は周りの社員に気づかれないようにしたが、それでも声はやけに重々しく変わつてしまつていた。はす向かいの席の磯崎和歌子がちらりと克行に視線を向ける。

今日、何時頃仕事終わるんだい？

「え？」

ちょっと会えねえかなあ

「なぜですか？」

聞きたいことがあるんだ。それにせつかく知り合えた仲間じゃないか。少しくらいつきあつてもいいだらう。俺、今日非番なんで暇を持て余してゐるんだ。

「仲間」その言葉がなおさら克行の心を重くした。

「今どこにいらっしゃるんですか？」

あなたの会社のすぐそばさ

克行はどきりとした。そういえば先日はただ名前を教えただけで

克行がどこに勤めているかを教えたつもりはなかつた。もし、教えたところで大手の会社と違つてすぐにわかるようなものでもない。それなのに立花は昨日の今日でもう克行の職場まで電話をかけてきている。

「おい、どうしたんだい？ 会つてもうれるのかい？」

「は、はい。それじゃ これからどうですか？」

「これから？」

「ええ、三十分くらいならいいです」

「かまわんよ

「それならロビーで待つていてもらひますか。すぐ降りて行きます」

「待つてるよ

「ツツリと電話が切れる。

克行は少しの間茫然と電話を見つめていたが、やがてしかたなく立ち上がつた。本来ならば一度と会いたくない相手だ。しかし、もし今日会えないと言つたといふのであの男はきっと明日、明後日また連絡してくるだろう。それに、なぜあの男が克行に会いたがつているのかその理由も気になつた。あの男は「仲間」などという感情で動くような男ではない。もっと何かあの男にとつて大事なことで話があるのであらう。

克行がロビーに降りると立花がソファーに座つてのんびりと煙草を吸つてゐるのが見えた。

「よお」

立花は克行を見て軽く手をあげ立ち上がつた。昨日と同じ上ト黒いスースを着こんでいる。

「お待たせしました。さあ、こちりへ」

克行は事務的な口調で、立花をうながして地下へ歩き始めた。地下には三件ほど喫茶店が入つており、よく顧客との打合せはそこで行われていた。本来、会社のそばで特権者優遇計画に関連する行動はとりたくないなかつたが、それでも立花と一人でどこかで話すというのは気がすすまなかつた。何よりここならばあまり時間とどうづに

済むと考えた。

克行は喫茶店のガラス窓からなかを覗き、知り合いがないのを確かめてからなかに入つて行った。

克行たちは奥のなるべく周りに人がいないところを選んで座つた。

「なんでしょう」

克行はウェイトレスにコーヒーを頼んだ後さつそく立花に尋ねた。

「何か聞きたいことがあつたんでしょう」

「まあな」

立花はとぼけるような感じできょろきょろと周りを見渡した。

「それならどうぞ、仕事の都合であまり時間がないんです」

「そうかい、それじゃてつとり早く済まそーか……あなたの会社に桜川つて部長さんいるよな」

「桜川部長?」

突然出てきた桜川の名前に克行はどきりとした。だが、次の瞬間その意味を悟つた。立花の特命者リストにも桜川の名前が載つているのだ。

「いるだろ?」「

「ええ でも、なぜですか?」

克行はわざととぼけて聞いた。

「いや……どんな人なのかなと思ってね。それで出来たら……」

ウェイトレスがコーヒーを運んできて立花は言葉を切つた。立花は砂糖もクリームもいれないままコーヒーをすすつたが、熱かつたらしくすぐには放した。

「出来たら なんですか?」

克行はこちらから立花をうながした。

「写真をね……」

写真、その言葉ではつきりと立花の特命者リストに桜川の名前があることを確信した。特命者リストには特命者の住所や勤務先は載つても写真は出でていない。立花は桜川を殺すために写真を手に入れたがっているのだ。だが、立花もさすがにそのことを表に出す

つもりはないようで言い難そうに見える。

「写真ですか？」

克行はあくまでとぼけることにした。そしてとぼけながらじりするべきかを考えた。

「どんな人か写真が欲しいんだ」

立花の目がギラギラと克行を見つめる。その目には克行を通して桜川に対する殺意が明らかに読み取れた。

「あいにくですが」

「ないのかい？」

「今手持ちのものはありませんね。ただ一ヶ月か一ヶ月待つてもらわれば手にいれることは出来ると思います」

克行は考えたあげくそう答えた。さすがに自分の知っている人間を矢面にさらすようなことはしたくなかった。克行の答えに立花の表情が曇った。その目からはまだ殺意は消えてはいないが、とりあえず一步踏み誤ったというような表情に見えた。

「そつか……」

立花はカップを持つといつきに飲み干した。もうぬるくなつているのかと克行も一口飲んでみたがまだそれほど冷めたわけではなかった。

「俺は行くよ」

立花は金をテーブルに置くと不機嫌そうに立ち上がった。克行の一言ですでに別の人間と考へはじめているのだろう。

「待ってください」

克行は慌てて呼び止めた。

「なんだい？」

「いったいなぜ私の会社がわかつたんですね？ 私は名前しかあなたに教えていません」

立花は克行の質問にこやりと口をまげた。

「俺の職業教えたろ？」「

背筋が凍るような思いがした。この男ならば桜川の写真もすぐに

手にいれることだろう。立花はもう克行のことなど忘れてしまったかのように一人ですたすた早足で出て行ってしまった。

克行は立花が出て行くのを立ち上がりその場で見送り、立花が見えなくなるともう一度座り直した。おそらく、立花はこんなことで桜川を狙うのをやめたりはしないだろう。

なぜだか、立花とはもう一度どこかで会わなければいけないような気がした。

死のクリスマスイブ・7

七

十一月 十四日（木）

涼子から会社にいる克行に電話があつたのは木曜の夕方だった。涼子の口調から彼女がひどく興奮していることが読み取れた。

克行は夜、涼子に会おうと言つたが、涼子は外で会おうとした克行の意志に反してマンションに来ると言い張つた。確かに事が事だけに外で話すよりもマンションのほうが良いかも知れないと、克行は涼子の言葉に従うこととした。

克行は駅からマンションまでの道順を教え、涼子の来る時間に合わせ早めに仕事を終わらせ帰宅した。帰宅したのは九時過ぎだが、どうやって入ったのかすでに涼子は克行の部屋に上がりこんでいた。

「どうやつて入つたんだ？」

「ごめんね、妹だつて嘘ついて管理人さんに鍵を開けてもらつたの」涼子は悪びれた様子もなく驚く克行に笑いかけた。お人好しともいえる管理人の杉本老人の顔が思い出された。麻美に比べればずっと大人びて見える涼子が克行の妹などと本当に信じたのだろうか。すでに部屋はファンヒーターによつて暖まつている。まるで何度も訪れているような雰囲気で涼子は部屋でくつろいでいた。その涼子の様子に克行は大学時代に同棲していた時のことを思い出した。

「ずいぶん早かつたんだな、こんなに早く来るのは思つてなかつたよ」

「べつに構わないわ。仕事、急がしいんでしょ
「十一月にもなるとさすがにな。おまえもう何か食つたのか？ 何
か用意しようつか？」

「食事はもう済ませたからいいわ

「それで、何かわかったのか？」

克行はすぐに特権者優遇計画のことに話を移した。あまり個人的な話を涼子と続けたくはなかった。いまさら涼子とよりを戻すつもりもない。

「ええ

涼子は仕方無いという素振りでバックのなかから書類をいれるような封筒を取り出した。その真剣な眼差しにいつしか克行の表情も堅くなつていった。

「悪い情報か？」

けれど涼子はその質問には答えようとしなかつた。

「これを見て」

涼子は青と赤に分けられた数枚の書類を克行に突き出した。

「これは？」

「青い用紙のほうは今回の特権者優遇計画で特権者に任命された人たちのマスター・リスト。そして、この赤いほうが特命者のマスター・リスト。今日、役所の端末を叩いてリストにしてきたの」どちらの書類にもびっしりと名前や住所、年齢などいろいろな情報が並んでいる。

「それで？」

「そのなかには克行の名前はないわ」

克行は驚いて涼子を見つめた。

「ない？」

「そうよ、しかももう一人。頼まれていた五十嵐麻美さん、彼女の名前もないわ

「特命者リストに？」

「特命者リストにももちろん特権者リストのほうにも。ただし、不思議なことに各特権者への特命者の割り当てを行つた後のファイルには、はっきりとあなたの名前も彼女の名前も載せられている。しかも、もう一つ不思議なことがあるの。各都道府県毎の特権者、特

命者の人数は国が決定し、各市毎の数はその県が決めることになっている。今回、うちの市に割り当てられた特権者の数は百八人、都道府県ごとに割り当てられた特命者は六千一百六十四人。問題なのはこの中身なの。このなかには克行も、そして彼女も含まれているの

「どういふことなんだ？ 僕には何がどうなつてゐるのかわからない」

「そうね。ただのミスつてことも考えられるわ」

「ミス？」

「特権者優遇計画を実施するそれまでの過程のほとんどがコンピュータ処理で行われるわ。マスターからそれぞれのファイルへの振り分け、そして特権者への通知。全てがコンピュータに簡単な指示を行つだけ。だけど、一箇所だけコンピュータ以上の処理を事務員がやらなければいけない部分があるわ。それぞの特権者への特命者の指定。そこで事務員がコンピュータに対する指示を一特権者毎に行われることになつてゐるの」

「そこでミスが？」

「役所では今九十パーセントほどの情報はコンピュータ処理される。当然、市の住人の情報もコード化されファイルにある。特権者優遇計画にもそのファイルは参照という形で使われる。おそらくその時、オペレーターが誤ったコードを指示した」

「指示を間違つた？ オペレーターのミス？ そんなことで彼女の名前が特命者リストに載らなければならなかつたのか？」

克行は思わず大声を出した。

「まあ、待つて」

「待て？ 命が危険にさらされたんだぞ。ミスなんて言つてられるのか？ 明日にでも役所に行って彼女の名前を削除させる」

「無理よ」

涼子の声に克行はびくりとした。それほど涼子の声には緊迫した雰囲気があった。

「なぜだ？」

「そんなことが出来るようなところならそんな単純ミスをやらかしたりなんかするわけがないじゃない。ミスと言つても一度リストに載つてしまつたものを取り消すことなんか出来るわけないわ」

「……」

まつたくその通りだつた。特権者とか特命者とか選定はされるが、結局のところそれは人工削減の手段というだけで国にとって特権者が特命者リストに載つても特命者が特権者リストに載つてもいつこうに構わないのだ。

「それに……」

やや間があつてから涼子はさらに付け足した。「今度のことが本当にミスかどうか……それもまだ判断出来ない」

「なぜだ？ マスター・ファイルに載つていなかつたんだ。ミス以外何が考えられるっていうんだ」

克行はながばやけになつて吐き捨てた。

「実は毎年通常のファイル以外にシークレットファイルが設定されることになつてゐるんだけど」

「シークレットファイル？」

「ええ、文字通りそのファイルの中身は役所のなかでも限定された人間しか見ることが出来ないようになつてるの」

「つまり実行委員会のメンバー？」

「もつと限定される。役所のなかでもおそらくあれを見ることが出来るのは市長をいれて三人くらいしかいないと思う」

「そんな秘密にしなければいけないものつていつたい何が入つてゐんだろう？」

「さあ……けどひょっとしたらそのなかにあなたたち一人の名前が突然現れた原因が隠されてるかもしれない」

「見れないのか？」

涼子に危険を押しつけることになると知りながらも克行は聞かずいられなかつた。

「見ようと思えば……」

涼子はそう言ってそっと微笑んだ。その笑顔に克行は涼子が初めてそのつもりだということに気がついた。

「見るつもりなのか？」

「もちろん。克行の恋人の命がかかつてゐるんだもの。そのくらいのことでやらなきゃ。それに私自身もかなり興味があるの」
ぎゅっと固く拳を握り涼子ははつきりと言った。その姿に一度はシークレットファイルのなかを知りたいと思つた克行も、涼子がなにかひどく危険な道を歩き出そうとしているようで心配になつた。

「危険じゃないのか？」

だがすでに涼子はもう心を決めてしまつてゐるようだつた。

「大丈夫よ、克行だつてコンピュータには詳しいからわかるだらうけど実際にシステムを管理している人とシークレットファイルを見ることが出来る者とは違うの。だから、よほどしっかり管理してなきゃ私がシークレットファイルを覗き見したといひでばれやしないわよ」
その涼子の言葉に克行もそれ以上言おうとは思わなかつた。実際にどんなに危険だとしてもそのシークレットファイルを見るところで麻美の命を救えるかもしれないからだ。

「気をつけてくれ」

克行は一言だけ告げた。

「わかつてる。私だつてまだ死ぬつもりないわ。他に何か私に出来ることない？」

「もう一つ調べて欲しいことがあるんだ。以前、駅のホームで乱射事件を起こした特権者のこと憶えていいるか？」

「泉谷のこと？」

「そう、そんな名前の男だつた。なぜ知つてゐるんだ？」

「私だつて去年は委員会のメンバーだつたのよ。そのくらいのことを知つてゐるわ」

「そつか……その男があの後どうなつたか調べられないか？」

「死んだわ」涼子は即座に答えた。

「死んだ？」

「今日、計画のことを調べているうちに過去の記録が田口についたんだけど、その男のことも記録に書かれていた。あの事件を起こしてから一ヶ月後に青酸カリで自殺してたわ」

「自殺……」

「でも、本当に自殺かどうかはわからないけどね」

「わからないって？」

「国にしてみればこの特権者優遇計画のことをあまり表沙汰にはしたくないのよ。だからこそマスクにも圧力をかけている。そんな時にあんな事件でしょ。ひょっとしたら殺されたのかもしれない」

「……」

涼子の言葉に克行はぞつとした。

「ああ、そうだ」

涼子は思い出したようにつぶやいた。それは多少芝居がかつたもので、実のところ涼子が今日克行を訪ねた一番大きな理由がそこにあつたようだ。

「どうしたんだ？」

克行は涼子の言葉にどきりとして彼を見つめた。どんな形であれ、今役所に務める涼子の言葉は驚かされる。

そんな克行を満足気に眺めてから涼子は内ポケットから四つ折にされた一枚の用紙をぽいとテーブルの上に投げ出した。

「はい、お土産よ」

「土産？」

克行は涼子の表情に注意しながらその用紙を広げた。

用紙には5人の名前と住所、電話番号などの各自の情報が載っていた。おそらく市の住民ファイルからのコピーなのだろう。その5人のなかには克行自身の名前、さらに克行の仕事上の知り合いが一人、そしてあの立花の名前までもあった。

「これは……？」

おそるおそる克行は訪ねた。立花の名前があることでそれが非常

に重要な意味のある」とは察しがつてこる。

「わからない?」

いたずらっぽい目で涼子は克行を見た。

「まさか……」

克行ははつとした。

「そう、そのまさか。あなたの大事な彼女の名前の入ったリストを持つ者の名前よ。そいつらが彼女の命を握ってるわ」

あなたの大事な、そこの部分に力を込めて涼子は言った。

「これが……」

克行は改めて用紙を見つめた。さっきにも増してそこに書かれた名前が大きく見えた。何よりも立花の名前のあることが克行の心中に暗い影を落としていた。

(役所で声をかけられたあの時からそういう運命だったのかかもしれないな)

あの立花の狂ったようなにやついた笑いが脳裏に蘇つてくる。

「私のほうもいろいろと麻美さんを救う手段は考えてみる。だけど、最後の手段としてはあなたの持つ権利を使う以外ないかもしないわね」

すでに涼子の顔からはあのいたずらっぽい笑みは消えている。

「ああ

克行自身そのことはとてもよくわかっているつもりだつた。もし涼子が調べてくれていなくともそれでも何とかして麻美を狙う特権者を消し去るつもりでいたのだ。

「拳銃は?」

「え? ああ、あるよ」

克行はベッド脇の引き出しの奥から包みに包んだままの拳銃を取り出した。その拳銃の保管場所に涼子は不満を覚えたような目で言った。

「あと一日で特権者優遇計画が始まるわ。明日からはつねに銃を持ち歩くよにして。へたすると特権者のほうが特命者に命を狙われ

る可能性だつてあるのよ

「特権者が？」

「過去に偶然自分が特命者として登録されていることを知つて、その特権者を殺したという例が一、二件あつたつて話を聞いたことがある。無理もないわ。誰だつて殺されるよりは殺すほうがまだいいと思つてるのよ。克行も気をつけたほうがいいわ」

「殺されるよりも殺すほう……か。確かにそうかもしれないな」

克行はうつむいてつぶやいた。

「え？」

「殺されるよりも殺すほうがいい。その通りだ。俺だつてこんな立場じゃなければ、配られたのがこんな特命者リストじゃなく、まったく知らない奴らの集まりだつたならきっとそう思えただろ。誰だつてそうだ、誰だつて死にたいなんて思つてる奴なんているはずがないんだからな」

心のなかでまだ形になつていない不形成な気持ちまでもが激流のように克行の口から漏れた。それはまったく嘘偽りのない今の克行の気持ちだった。

「そんなこと考えちゃダメよ。今はただどうやって乗り切るかだけを考えなきゃ」

「考へてる、考へてるさ。けど、おまえからこの彼女の命を握つている奴らのリストをよこされた瞬間から俺の頭のなかにはこいつらをどうやって、いつ殺すか、そんなことばかりが浮かんでくるんだ。俺もあいつらと同じだ。人を殺すことを楽しんでいるあいつらと変わりないんだ！」

「……克行……」

涼子の手が克行の左手にそっと触れた。その感触に克行ははつとして顔をあげた。涼子の顔がすぐそこにあった。忘れていた学生時代の一人の姿がそこにあつた。

「私、克行のことを忘れない。

別れ際に言った涼子の言葉がふつと脳裏をよぎった。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

心がある頃へ引き戻される思いがした。

克行は必死にそれを否定しようとした。全ては終わったことだ、過去のことだと思いこもつとした。だが、出来なかつた。

涼子の赤い唇が克行の唇に触れた瞬間、克行はほとんど本能的に涼子の体を抱きしめていた。やわらかなその感触はあの頃を彷彿させるのに十分だった。

死のクリスマスイブ・8

八

坂本伸一・三十九歳

KINIC株式会社 係長

旭台衆応2 - 5 - 7

05214 - 3364 - 154

ランク・C

富士川義幸・二十八歳

私立川越高校 教員

境八日町牛込65 - 7 - 3

06528 - 1473 - 581

ランク・B

波川稔・四十二歳

IMM 技術研究所 課長

石沢亞栗42 - 883 - 1

10571 - 2010 - 112

ランク・C

立花勇作・三十一歳

港橋警察署勤務

穂墨区高城8 - 69 - 44

2102 - 5860 - 3236

ランク・A A

風間克行・二十六歳

KCS株式会社

八坂区背能 85 - 5 - 67

0137 - 5671 - 4207

ランク・C

碓井正隆・十九歳

八野倉大学二年

石鷹区駆詰 42 - 44 - 82

メゾンWATASE 202号室

0150 - 8884 - 2956

ランク・C

乱れたベッドに寄りかかりビールを飲みながら、克行はベッド脇にある電気スタンドの小さな明かりで涼子の置いていたリスト（「殺人者リスト」、涼子と克行の二人はこの麻美の命を握る克行を含めた六名のリストをそう呼ぶことに決めた）に見入っていた。

氣のせいかほのかに涼子のつけていた香水の香りが、まだベッドに残っているように感じられる。ほんの少し麻美にたいして後ろめたさを感じていた。

おまえは自分の恋人が危険にさらされようとしているのに何をやつているんだ？ それともこのまま麻美のことなど忘れてしまって涼子とよりを戻すつもりか？

まだ涼子の白く豊かな乳房の感触が、そしてあの時の彼女の声もまたはつきりと記憶に残っている。

（早く忘れてしまえ！）

涼子のことはどうせ、一夜のことに過ぎない。そもそも、このまま涼子とよりを戻す気持ちなどまったくないのだ。

愛してるわ……私が克行を守つてあげる。

帰り際に耳元で囁いた涼子の声が頭に響き、克行は頭を押された。忘れるんだ！ 今考えなきゃいけないのは殺人者リストのなかに

ある特権者からいかにして麻美を守るかということだけだ。

克行はいつきに飲みかけのビールを飲み干すと、再びキッチンの冷蔵庫のなかからもう一罐取り出してきた。アルコールの力で全てを忘れ去ってしまったかった。すでに四罐、飲み干しており、かなり酔いがまわつてきているのは自覚しているが、それでもまだ足りないようと思えた。無意識のうちに指でカタカタとテーブルを小刻みに叩いていることに気づいた。煙草が吸いたかった。銘柄などはなんでも良い。とにかく煙草を口にしたい欲求にかられていた。三年前にやめて以来ずっと口にしていない。以前ならば買い置きの煙草がいつもどこかにあったのだが、今では微かな煙草の匂いすらしていらない。かといって今から買いに行くわけにはいかない。情けないことに、彼はアルコールにまるで強くなかつた。これから煙草を買いに行こうとすればおそらく幾段も連なる階段を一階まで無事に下りることはとても危険な賭けになるだろう。もし無事に自動販売機まで行つたとしても帰つてこられる保証はない。克行はじつと我慢し、煙りの代わりにアルコールを体のなかに流しこんだ。ビールで足りなければとつておきのウイスキーを開ければいい。

(それにしても……)

何か強い意志によつて自分の運命が決められているようなそんな不安を克行は覚えていた。

先日は自らの会社の上司や同僚、そして恋人の名前を特命者リストの中に発見し、今日は協力会社の上役、顧客先の課長の名前を特権者リストに見つけることになった。KINIC株式会社の坂本、IMMの波川がそれだった。二人とも一年くらい前から仕事を通じて知り合い、現在でもよく仕事で顔をあわせる。坂本にいたつては今日も電話で話をしたばかりだ。

(彼らが特権者だったなんて……)

自分の回りの人間関係がほんの一、二日の間にぼろぼろと崩れ去つて行くような感じがした。

もう一度特権者リストを見つめてから克行はおもむろにビールの

罐を開け、半分ほどグビグビと飲んだ。アルコールが体のなかで暴れていっているのがわかる。このままのペース飲み続ければ、一時間後には確実に胃に納まっているものは全て外へと放出されるだろう。それがわかつても、克行は飲み続けることを望んだ。

逃げ出してしまいたい……

このまま麻美のことも特権者優遇計画のことも全て忘れて逃げ出せたならどれほど楽になれるだろう。なによりも今回の特権者優遇計画は危険すぎる。それは涼子に言われるまでもなく、麻美の名前をリストに見た時から克行にも本能的に感じていた。なぜだか自分が特権者優遇計画の全ての中心に位置しているようにさえ思えた。

この特権者優遇計画には何者かの大きな意志が働いている。それが國家の意志なのか、それとももっと別の誰かの意志なのかそれはわからない。だが、それでも大きな意志が働いて克行に「死」という素敵なプレゼントを送ろうとしている。

イバラの鞭を持つサンタクロースのプレゼント。この年齢になつて再び現れた悪夢のサンタクロース。特権者というそりに引かれ、袋の中には多くの「死」が入つている。爽やかな笑顔を振りましてサンタクロースは言うだろう。『年に一度のクリスマス。サンタクロースからのプレゼントをさあどうぞ』それからおもむろに袋を開けて黒光りする拳銃を取り出す。そして、爽やかな笑顔はそのままに拳銃を乱射する。

それはあまりに馬鹿げていて、見ている人々はショーむだと思つて喜ぶだろう。ああ、何て素晴らしいクリスマス、何て愉快なクリスマス。それが現実だとわかつてるのはサンタクロースとそりを引いてる特権者たち、そして殺された人々。

今年は自分もそのショーに加わるうとしている。

(忘れててしまえ！)

それなら本当に忘れてしまうか？ 麻美のことなど過去のことと葬つてしまうか？ そして麻美が無事に生き延びたことを知つたらばまた戻つてくれればいい。おまえなら出来るじゃないか。涼子に

やつたことをやればいいんだ。

ちくしょう！

再びビールにしがみつき、一気に残りを飲み干した。そして、すぐには次のビールへ手を延ばす。いよいよもって世界は回り始め、体は克行に警告を促す。克行はその警告を快く無視した。

克行は自分を含めた殺人者リストを改めてまじまじと見つめた。文字がふにゃふにゃと踊つて読める。

しかし、何よりもその殺人者リストのなかで目をひいたのはある立花勇作の名前だった。しかも彼の特権者としてのランクはAA、つまり最も優れていると評価されている。涼子の話ではランクAの特権者でも数人いるだけでAAというのは涼子も初めて見たと言つていた。そんな男を克行は相手にしなければいけないのだ。

俺はあいつに勝てるのか？

克行はふと立花の姿を思い描いた。警察官として十分なまでにがつちりした体、そしてあのどこか神経質そうな身のこなし、まともにやりあって勝てるとはとうてい思えなかつた。ただ一つ克行が有利な点といえば立花がこれほどの特権者優遇計画に対しても情報を得ていなかつうということだけだ。しかし、それでも克行にはあの男の死体の姿を想像することは出来なかつた。

あいつが麻美を狙わないことを祈るだけだ……

全てのものを投げ捨てても麻美を守りたいと克行は思った。そのためならばどんなことをしてもいいと本気で思った。もし、立花が部長の命を狙うならばそれを手伝つてもいいと、いや、会社の人間全ての命をくれてやつてもいいとさえ思つた。

「麻美……」

克行はぼんやりと宙を見据え、麻美のことを思つた。

麻美はどう思うだろう。俺が特権者となつたことを、そして彼女が特命者として俺のリストに載つたことを……

告げたくはなかつた。だが、そんなわけにはいかない。麻美のためにも、そしてこれからのためにも彼女に話さなければいけない。

アルコールがまわり朦朧とする意識のなかで彼女のことをなんとしてでも守つてみせると克行は誓つた。

時計の針はすでに午前一時をまわりつとしつてこる。

九

十一月 十七日（月）

冬にしては暖かい風がそよそよと頬に触れる。公園は冬だというのに、それでも日曜になるとカップルや親子連れが姿を現す。

克行はベンチに座り、じっとその平和そうに見える光景を眺めていた。その頭のなかは当然のことのように麻美のことを、そして今夜から始まる「特権者優遇計画」のことで占められている。

先日の夜以来涼子からは何の連絡もない。克行のほうからも彼女に連絡はしていない。連絡しづらいということもあったが、どちらかといふと全面的に涼子を信頼していた。彼女が連絡してこないと、ということは何の情報も得られないということだ。そのため克行は新たな道を模索しようと試みることにした。

公園の中心にある花時計がきつかり午後一時を示した時、一人の男が克行のいるベンチに向かつて歩いてくるのが見えた。

男は克行を見定めると人なつこい笑顔を浮かべ軽く手をあげた。

「やあ」

克行もまた軽く左手をあげてみせた。右手はしっかりとコートのポケットへいれられ拳銃を握っている。

「久しぶりだね」

藤井和弘はそう言つて克行の隣へどつかと腰をおろした。記者である藤井とは三年前の冬に会社の仲間に誘われるままに行つたスキ一場で知り合つた。克行よりも一つ年上だが見た感じはそれよりもずっと年上に見える。

「仕事はどう？ 忙しい？」

「ああ、例の」とくわ。俺たちは常に忙しく常に暇だからね。忙し

いのは能力がある証拠、暇なのは無能な証拠だ。世間にやせんざん悪口を言われてるがね」

『アウトサイド』という藤井が記事を書いている雑誌のほとんどはアイドルの「ゴシップ」記事が中心で、彼も常に年端もないかないアイドルたちを追いかけている。

「あんたはよっぽど忙しいって言いたいのかい?」

「その通り。その証拠に俺は三日前にこの日本に帰ってきたってわけだ。それで? その忙しきの俺をこんな寒い公園に呼び出したわけを教えてもらおうか」

相変わらず人なつこい笑顔を見せながら藤井は言った。

「あんたのその笑顔を消してしまつかもしれない話だよ。へたすれば青ざめるこことになるかも」

「おじおじ、冗談よせよ。俺のこの笑顔は生まれつきでね、俺が青ざめるとしたら俺の書いた記事がもとで雑誌の売れ行きがひっく落ちこむってことだぜ」
「いいや、残念ながらそんな話しじゃないよ。俺があんたと話をしたいのは「特権者優遇計画」のことなんだ。あんただって知ってるだろ」

克行はわざと明るい口調で計画のことを口にした。藤井の顔から笑顔が消えたが、それはほんの一瞬のことだった。

「一応はね」

「どのくらいのことを知ってる?」

「さあねえ……どちらにしても俺の専門外の話だな。なぜだい?」

「なぜマスコミはあの政策について何も報じようとしないのかと思つてね」

「不思議なことを聞くね。マスコミがそいつについて報じないことに何が問題があるっていうんだい? それに「特権者優遇計画」、そいつは君にどんなふうに関わっているっていうんだ?」

藤井は何かを疑うようにちらりと克行の顔を見た。克行はそのままに彼がすでにある考えに達していることを悟つた。

「俺は今、最低でも六人あの世へ送り出すことの出来るものを持っているっていうことだよ」

ちらりと克行のポケットの膨らみを見て、さすがに藤井の顔からあの人なつこい笑顔は消え去った。だが、それほど驚いたような顔を見せなかつた。

一瞬の沈黙の後、藤井はふうっと一息溜め息をついた。

「そういうことか……ちなみにそいつは最低六人じゃなく最高六人をの間違いじゃないのかい？」

「そうだね……」

いや、あくまでも最低六人なんだよ。と心のなかでつぶやきながらもあえてそのことには触れようとせずに素直に頷いた。克行が考えていることを全て伝える必要はない。

「それで俺に何をしろって言うんだ？　俺に『特権者優遇計画』の問題性を記事にしろって言つのか？」の『シップ専門の記者にそいつをしろって？』

「べつにあんたにやつてくれとは言つてないよ。ただ、それをやつてくれる人を紹介して欲しいって言つてるんだ」

「同じことだ」

「なぜだ？　なぜあんたたちはそれほどまでに避けようとするんだ？」

「君は考え違いをしているよ。マスコミはそれほど正義感が強いわけじゃない」

「それでもマスコミは常に政治のスキヤンダルを報道しているじゃないか？　以前、どこかの雑誌で『特権者優遇計画』のことを取り上げていたことがあった」

「俺も読んだ記憶があるよ。そういう物好き　いや、確かに正義感のある記者もいるだろうね。けど一人じゃ何も出来やしないよ。ちょっと手を出してみてもどこからか圧力がかかってそれで終わりさ」

「圧力が？　それが怖いのか？」

「怖いね、だが、記事にしないのはそれだけの理由じゃない。確かにしひの雑誌でも政治家のスキヤンダルは記事にするよ。たいして深い傷にならない程度のスキヤンダルにね。本当に政治家をつぶそうなんて考えて記事を書く奴なんかはないよ。その証拠に決してそれらは彼らの命取りになることはないだろ? それにそんなスキヤンダルは民衆が望むことだ」

「それじゃ

「君が言っているものを民衆は望んじやしないよ。民衆が望んでいるのはあくまでどうでもいい自らの楽しみを満足させてくれるスキヤンダルだ。政治家の汚職事件だってそうさ。政治家が裏で企業から金をもらっていることなんか、俺たちが報道する必要もなく誰でもがわかつていることだ。それでもバカな政治家がとんでもないミスをやらかす。それで俺たちがとりあえず報道し、民衆はとりあえず怒る。そして満足する。それだけのことなんだ」

藤井は軽く肩をすくめてみせた。

「そんな……そんなものでしかないっていうのか?」

「そうさ、うちの雑誌がよく売れるのはそういうわけさ。必ず毎週、どこかの可哀相な人々の記事が載る。過労で旦那を亡くした哀れな未亡人。血液感染によってエイズにかかって余命いくばくもない少年。そいつを読むやつらは一様に可哀相に涙を流す。だが、心のなかじやその哀れなやつらと自分とを比較しているのさ。私たちは大丈夫、私たちはずっと幸せだってね。人間なんて身勝手なもんだ。それにマスコミには大前提があるんだ。読者を不安がらせないことだ。例えば一、三年前から突如降つて湧いた障害者たち。国は原因不明と発表しているが事実は違う。しっかりと原因究明されているんだ。だがその原因が問題だ。なんとその原因を作りあげたのは我が家には今やどうしようもない輸入品なのさ。アメリカ産の農薬だらけの米やオレンジ。しかし、そいつを発表するわけにはいかない。農薬についていない米やオレンジなど世界のどこを搜したってありはしないからだ。確かに日本にもまだほんのわずかながら農家は存

在している。けど、しょせん日本人全てを支えることなど出来るはずがないんだ。一九九六年に米の輸入開放が間違つていたとしてもそんなことを今更言えるはずがない。知つてゐる奴らだけが注意するだけなんだ。マスコミなんてそんなものさ。正義感ぶつていてるだけで本当はみんな金のために記事を作りあげてるんだ」

「あんたはそれで」

恥ずかしくないのか？思わずそう言いそうになり克行は口をつぐんだ。そして藤井も克行が何を言おうとしたかは察したようにほんの少し視線をさせてうつむいたが、それほど氣にした様子はなかった。

「確かに特権者に選ばれた君にとつてそいつは非常に大きな問題で、政策が間違つていると感じてしまつても仕方がないことだと思つよ」同情するように藤井は言い、それからもつと驚くことを彼は口にした。「だが、俺は「特権者優遇計画」がそれほど間違つた政策だとは思つちゃいないんだ」

「なんだって？」

克行は思わず驚きの声をあげた。「間違つていない？何を言つてるんだ？」

「まあ聞けよ。確かに君が感じていることはよくわかる。たとえ人工削減計画とはいえ人殺しをやるのは間違いだと違うんだろ。しかし、現実にこの日本、いや世界中には人間がゴミ屑以上に存在しているんだぜ。そいつをどうやって解決しようつて言つんだ？見なよ、あの光景を」

藤井はそう言つて顎をしゃくりあげた。花時計の向こう側に二、三歳くらいの子供を背にした白髪の老人がのんびりと散歩しているのが見て取れた。

「あの小さな孫……いや、曾孫かもしれないな。いずれにしてもあの爺さんは子供を背にじょつていてる。君にはあの光景がどう見える？」

「実際に平和的な光景だと思うね。まさか、子供が爺さんの頭に拳銃

を突きつけていなければだけ』

投げやりに克行は答えた。藤井が何を言おうとしているのかわからなかつた。

「なるほど、拳銃を突きつけていなければか。それなら大丈夫さ。あの子はすっかり寝むつちまつてる。平和的光景だろう。しかし、現実にはどうだらうな」

「現実には？ 何を言つてるんだ？」

「現在の老人と子供の比率を知つてゐるかつてことだ。今はまだそれほどじやないが、あの子供が俺たちくらいになるころにはあの子供は一人で老人を十人くらい養うことになるんだぜ。つまり現実にはあの爺さんが子供の背におぶさつてゐることさ」

やつと藤井が何を言おうとしているのかがわかつた。

「だから『特権者優遇計画』は許されるつて言つのか？」

「必要悪つて言葉を知つてゐるだらう。例えば」

「あんたの例え話しさはたくさんだ！」

「そう言つなよ。俺は君よりも計画についても世界の現状についても知つてゐる。アメリカじやあ人殺しをゲームとして楽しむことが法律で許されるつてことを知つてゐるか？ いかに歩き続けていられるかそれがゲームの内容だ。健全でないのは歩けなくなつた時に頭を一発吹き飛ばされるつてことだ。生き残れるのはただ一人、それ以外は皆殺される。まだ企画段階だがすでに何十人もの子供たちがそのゲームへの参加を望んでゐる。そいつをどう思う？」「そいつらは狂つてるんだ！ それとも罰ゲームの中身を嘘だと思つてゐるかのどちらかなんだ」

「そうだろうね。日本人の多くが『特権者優遇計画』が実際に行われていることを信じないようにね。いずれにしても日本の政策なんてかわいいもんだ」

「つまりあんたは俺に『平氣で人殺しをやつてのける』と言つてるのか？」

「そつとは言つていないよ。ただ俺たちマスクミが動かない理由を教

えてあげただけだ

(同じことだらう)

克行は暗い気持ちで思った。このまま「特権者優遇計画」が始まればきっとそういうことになるだらうと予想していた。それは自分でも認めたくない予想だった。

「いずれにしてもあんたは動いてはくれないわけだ」

克行は藤井に麻美のことを話すのをやめた。藤井は麻美のことくらいで考えを変えるようなことはしない。あくまで客観的な見方が出来る男だ。

「悪いけどね」

そして藤井はゆっくりと立ち上がった。「力になれずに申し訳ないが、恨まないでくれよ。君とはいつまでも仲間でいいんだ」

「大丈夫、断わられた腹癪せにあんたをターゲットにしたりはしないよ」

「その点は信頼しているよ。それにいくら君が俺を狙おうとしても、あいにく俺は今夜にはハワイ行きの飛行機に乗っている。そして帰ってくるのは正月あけだ」

「またガキ相手に遊んでくるのかい？」

「そうだ。俺だってあんなガキどもをカメラ持つて追い回すのは嫌だが、それでも奴らは金になるんでね」

「がんばってくれ」

克行は精一杯笑顔をつくつてみせたが、それはあまりうまくはいかなかつた。藤井は来たときと同じように軽く右手をあげて去つて行つた。

藤井が立ち去つたあと、視線は無意識のうちにさつきの老人の姿を搜していたが、すでに家路についたのか見つけることは出来なかつた。

それでも俺は認めたくない。いや、認めるわけにはいかないと思つた。克行はベンチに座り込んだまま、麻美に今夜どう伝えたらいいものかと頭を悩ませていた。

十

緊張感で手の平が汗をかいている。

一秒、また一秒と時間が近づいている。

「どうしたの？ この前から克行変だよ」

心を探るような眼差しで麻美が不思議そうに克行を眺めている。だが、その目は決して克行の心の全てを見抜いてはいない。ほんの少し克行の様子がいつもと違うことに気づいているにすぎない。それは克行にとつて救いでもあり、苦痛でもあった。

克行はそんな麻美の言葉にまた時計を振り返った。

十一時三十二分。あと二十八分で特権者優遇計画が始まる。

話さなければいけない。

もともとそのつもりで今夜麻美の部屋を訪れたのだ。いざなは話さなければいけないと思いつつ一週間が過ぎてしまった。藤井を通じてマスクミを動かし、「特権者優遇計画」の問題点を世間に訴えかけることで麻美を救うことが出来るのではないかと考えたが、その考えは打ち破られた。

彼女に伝えなければならない。

このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしもそれを破つた時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることがあります。

ペナルティ？ 今更いつたいどんなペナルティがあるっていうんだ？

「やっぱり今日の克行、どつか變よ。どこか上の空で……いつたい何を考えてるの？」

克行も明日仕事があるんでしあう。いくら日曜だからって、いつも日曜の夜は早めに帰っちゃうじゃないの。それに先週だって、連

絡してもぜんぜんないんだもの。どうしたの？」

麻美はベッドに腰かけ、黙つて座っている克行をじっと見つめた。答えられるはずがなかつた。麻美と言葉を交わすだけで涼子とのことがばれそうな気がして電話にすら出ようとしなかつたのだ。ベッドわきのテーブルの上に読みかけの手紙が広げてある。

「手紙……誰から？」

つい話題をそらした。

「これ？ 父さんからよ。この前、届いたの。ちょっとと思いつ出して読んでただけ」

麻美はそう言って即座に手紙を片付けた。そういうえば麻美の父親は国家公務員という話を聞いたことがある。麻美も少しばかり特権者優遇計画について知つているのだろうか。

克行は再び言葉を搜すようにぐるりと部屋を見回した。

でっぷりと肥えた黒猫のルシファーは克行を見るなりいつものようになにべつドの下へ潜り込み、それでもその青い目でじっと克行を観察している。まるでいち早く克行の心のなかを察しているようで克行はぞっとした。

「麻美……」

やつと克行は口を開いた。

「何？」

麻美が身を乗り出した。

「明日のこと知つてるだろ」

「明日？」

一瞬、麻美の顔が硬張る。彼女も心のどこかに特権者優遇計画のことがひつかかっていたのだろうか。

「特権者優遇計画のこと」

「…………あのこと……でも、それがどうかしたの？ 私たちにはいっさい関係のない話よ」

「そういうわけにいかなくなつた。実は……今年、俺も特権者として選ばれたんだ」

克行の言葉にさすがに麻美の顔が白くすつと透き通っていく。目は何が起こったのか見定めるかのようにきょろきょろと動き、薄い紅い唇は微かに震え、その場を補う言葉を捜している。

その麻美の仕種から彼女がいかに驚いたか克行には想像出来た。そして、その彼女の驚きは克行の予想をはるかに上回るものでかえつて克行はどうしていいかわからずただ、じつと麻美を見守つた。しばらくの間、二人とも口を開こうとはしなかつた。

通りを横切る車のエンジン音が手に取るように聞こえてくる。

十一時四十三分。あと十七分。

やつと麻美が口を開いた。

「なぜ……？ なんで克行が……？ どうしてなの？」

「わからない……」

「でも……！」

「いつたい何がどうなつてるのが俺にもわからないんだ。先週の日曜の朝、突然通知が届いたんだ」

「先週の日曜？ それじゃ、この前会つた時に？」

「そう、あの朝だ」

「なんで言つてくれなかつたの？」

責めるような目で麻美が言つた。

「こんなこと誰にも言いたくなかった。当然だらう。特権者なんて言い方をしてるけど、実際には人殺しのことだ。黙つているつもりだつた」

「克行も……人を殺すの？ 特権者に選ばれたって言つても、どうしても人を殺さなきゃいけないってことないはずよ。人を殺さなくとも済むんでしょ」

哀願するような麻美の言葉に克行は胸が痛くなるような感じがした。やはりもう一つのことも話さなきゃいけない。そうすることが麻美のためだ。

「そりや、そうだけど。噂じや、権利を破棄すると来年は俺が特命者リストに載ることになるそうじやないか」

「そんなの嘘よ！ お願い、計画のことなんか忘れて…」「それだけじゃないんだ！」

「それだけじゃない？ どういってこと？ まだ何かあるの？」

「麻美の手がぎゅっときつくなーシーツを握りしめる。

「……俺の持つ特命者リストのなかに……その……」

「何なの？」

「君の……麻美の名前があるんだ」

「……私の……名前？ 克行のリストのなかに？」

さつきより麻美の驚きは大きくはないようすに克行には見えた。ただきつく下唇を噛み、鋭い視線で克行を見つめている。

「麻美……」

「それで……克行はどうするの？」

「え？」

「私を……殺すの？ 特権者優遇計画が始まるまであと 十一分、そのために今夜私のところにやって来たの？ もう拳銃は持つてきているの？」

克行から視線をそらすことになく麻美は挑戦するような口ぶりで言った。

「まさか！ 僕がなんで麻美を殺さなきゃいけないんだ！」

思わず克行は立ち上がり怒鳴った。

「俺はおまえのことを愛してるんだ。俺がおまえのことを殺すわけないだろ！」

「克行……」

「俺はおまえのことを守りたいんだ。ほら、この通りほかのおまえを狙う奴らのリストだつてある。こいつらを殺してでもおまえを守つてやる！」

克行はポケットのなかから殺人者リストを取り出した。

「リスト？」

「ああ、こいつだ。ここに載っている俺を含めた6人が麻美の名前の入ったリストを持つている」

リストを麻美に手渡すと彼女は驚いたようにリストと克行を見比べた。

「どうして？ どうして克行がこんなものを持つているの？」

「……市役所に勤めてる友人が調べてくれたんだ」

涼子の名前を口に出すのは避けた。先日の夜のことが思い出され、克行は心のなかで小さく麻美に詫びた。

「友達？ ……その人、計画に関わっているの？」

「去年、実行委員になつたらしい。けど、今年は一切関わっていない。月曜に特権者全員を集めての説明会があつたんだが、その帰りに偶然会って、事情を話すと調べてくれたんだ。そいつが言うには今回の特権者計画にミスがあつたんだろうって。だから、麻美の名前がリストに載つたんだろう」

「ミス？」

「ああ、まつたく馬鹿げてる。そんな市役所のミスなんかで人の命がむざむざ危険にさらされるんだからな！」

克行はつりつりと部屋を歩き回つゝらだちを押さえようとした。

「克行……」

少しの間、麻美はリストをじつと見つめて何やら考えこんでいたが、やがて克行を見つめつぶやいた。

「え？」

「克行はどうするつもりなの？」

克行にはその麻美の姿が意外にも冷静に映つていた。

「だから……おまえを」

「私を守るつて言つたけど、こつたいどうやって私を守つてくれるの？」

「……」

麻美の言葉に克行は言葉を詰まらせた。ポケットに忍ばせてある拳銃が一瞬鉄の固まりのように重たくなる。

「特権者優遇計画が終わるまで一日一十四時間ずっと私についてしてくれるの？」

克行は再び麻美の前に座り込んだ。

「いや……実際に計画による殺人が一番多いのはクリスマス・イブからクリスマスにかけての一日前らしい。だから、その一日間さえ外出しないようにしていればおそらくそれほど危険なことはないだろ？」

「でも完全に安全じゃないわ」

その通りだと克行は思った。現に立花のようつに特権者優遇計画に生きがいを感じているような奴もいる。

「ああ……」

「克行……」

じつと麻美の目が克行の目を見つめる。ビニカ不安氣でその不安が克行に何かを訴えている。麻美がその瞳の奥に何を考えているのか、それを想像するの怖かつた。

十一時五十四分。

「心配するな、麻美のことは俺が守つてやる。誰にもおまえのことを見殺させたりしない。誰にもだ……」

ぎゅっと麻美の体を引き寄せ力一杯抱きしめる。涼子とはビニカ違うぬくもりが伝わってくる。

そうだ、俺が愛しているのは涼子じゃない。麻美なんだ。

克行は改めて麻美への愛を認識した。そして、彼女のことと命をかけても守ろうと決意していた。その克行の決意をはつきり受け止めたのか麻美は克行の腕の中で大きく頷いた。

時計の長針はついに短針に追いついた。

今、特権者優遇計画が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197z/>

死のクリスマスイブ

2011年12月25日16時51分発行